国語法

音声口語法

三宅武郎

國語科學講座

—Ⅵ—

國語法

音聲口語法

三宅武郎

株式會社
明治書院

國語科學講座

—VI—

國語法

音聲口語法

三宅武郎

株式會社
明治書院

目次

一　言葉調子……………………………〈四〉
二　發音……………………………〈五〉
三　語法……………………………〈七〉
四　アクセント法……………………………〈三七〉

音聲口語法

三宅武郎

音聲口語法は、第一部言葉調子・第二部發音・第三部語法・第四部アクセント法の四部から成り立ちます。

語法においては、その根本第一義において、山田博士の文法學説に基づきました。それ以外は私の責任です。

日本文法を「大佛」にたとへれば、山田博士は、その開眼の大導師です。私は、大佛の廣前に奉請して、恭しく、わが開眼の大導師を頂禮します。

山田文法の骨髓は、その用言論にあります。用言論の骨髓は、陳述の力の發見にあります。陳述の力の發見によつて、山田博士も自ら救はれました。日本文法も眼を開きました。コトタマが、大きく、青空を仰いで息吹きしました。

私は、山田博士の日本文法論一巻によつて、幸に「陳述の力」の信を得させて頂きました。實に、古人の心も偲ばれます。

かくて、陳述の力の「信」を得てからは、孫吳空の如く暴れ廻ること、まづ、この稿の通りです。孫吳空ぢやあぶない。まつたくその通り。けれども、いくら危なさうでも大丈夫です。一たび金剛の如き「陳述の力」の信を得た上は、廣大な彌陀の手が、常に、私の踏み轟かす觔斗雲の下にあります。

アクセント法については、山田美妙齋・佐久間・神保・故常深(つねみ)千里・故井上奥本・長友宮田幸一－諸氏の名を稱します。

一　言葉調子

音聲口語法は、言葉調子の基礎の上に立つ。

言葉調子の分類の手續については説明を省略して、直ちに、その基本的な型を表示する。

(一)肯　定　↗　(二)否　定　↘　(三)疑　問　↗(疑問詞や語氣述詞の助けをかりないもの)

(四)疑　惑　⤻　(五)感嘆・呼掛(一)　↗　(六)呼　掛(二)　↘

語氣の中では、肯定の語氣を基本とする。否定も疑問も疑惑も、更に突き詰めて言へば感嘆も呼掛も、すべては肯定への道だ。國語の動詞の基本形が「u」で終ることも、あるいは、ここに深く根ざしてゐるのではあるまいか。

(一)　行く。　(二)　行く?　(三)　行く!

「行く」といふ一つの現象をあらはす言葉は、右の(一)(二)(三)に共通して同じだ。それが、なぜ、それぞれの違つた意味になるのか。それは、言葉調子による。即ち語氣による。

かやうに、語氣は、大きな陳述活動をする。それを、私は「文字に書き表はせないコトバ」として、假に「純粋語氣の述詞」といふ。純粋語氣の述詞は、コトバとしては最も根本的なもので、それ以上はウインクです。

上記の六つを基本的な型として、なほ、微妙な「いろあひ」や「かげ」を盛つた語氣の種類がたくさんある。それらがいろいろな音の連結を言語材料として、そこに、私の呼ぶ「語氣の述詞」を作る。例へば、疑問の語氣は「か」をとつて「君行くか」となる。肯定の語氣は「よ」をとつて「行くよ」となる。更に語氣の述詞だけでは満足しない、强い決意を含

た肯定の語氣は、遂に語氣の副詞（後述三五・六ペ參照）をとつて「きつと　行くよ」といふところまで發展する。これみな「語氣」の陳述活動によるものだ。

從來は、主として、文字の上に書きあらはされた文章に基づいてだけ考へられたから、この大きな陳述活動が輕視されて、それを表現する語氣の述詞も、單に、助詞の一部類として冷遇された。その「か・よ・ね・さ・ゾ」等のテニハを取り上げて、それを述詞――即ち從來の用言（動詞・形容詞など）と同じ地位に置くことは、ひとへに深く『音聲』を信じるのによる。私は、コトタマにウケヒして、今、高く鞭を擧げてルビコンに馬を乘り入れる。

二　發　音

コトタマは、その心をあらはしたがつてゐる。コトタマは、その姿をあらはしたがつてゐる。コトタマが、その姿をあらはしたのが、即ち、カナとローマ字。カナは、綴音字。ローマ字は、單音字。

コトタマは、その姿を一さう精しく、かつ、廣く世界に向つて現はしたいと思ふとき、綴音字のカナでよりも、單音字のローマ字で書いて欲しがつてゐる。それについて、不完全なローマ字の改良を望んで止まない。

第一に、必要な字數が足りない。そこで、英語の sh やドイツ語の sch など、いろいろな合せ字で非常な不便を感じてゐる。もし國際音聲記號の「ʃ」をとつて一つの「ʃ」を增補すれば、わが大いなるコトタマは、おのが前に自己實現の道の直くされた喜びを感じるだらう。

現在のローマ字の二十六字でも、昔の人が次第に增補して作り上げて來たのだ。例へばGはCに、J（j）はI（i）

に、おのおの若干の修飾を加へて作つたもの。WはVを二つ合はせたもの。VとUとも同じ文字から分化したもの。だから二十世紀の私達が、ngに對して「ŋ」を一つ増補するくらゐ、實はなんでもないことだ。むしろ、ローマ字の生命の火を繼いで、その發達史を永遠ならしめるものだ。いはゆる三内鼻音(m・n・ng)の一たるngに對して、今日なほ「ŋ」を持ち得ないのは、私達の文化的恥辱ではないか。

第二に、國際的な代表音價の決つてゐないものがある。例へば「j」「c」など。これを公正に見て「j」「c」とする。これ國際音聲記號の大要音價だ。

第三に、その代表音價に基づいて國際的な代表字名を協定する必要がある。

第四に、イロハに對するアイウエオのやうに、現行の字順の外に、別に、科學的な字順の一系統を用意しておく。これは一世紀の未來のために。

第五には、小文字を基本とした字形の整理について。

以上、ローマ字の整理に關する五ヶ條の小見は、昭和四年一月號の「國語教育」及び、昭和四年六月號の「國語認識」所載の拙稿參照をこふ。さうして、ローマ字の國際的協定に關する一つの文化運動を起して頂きたい。

かやうな問題(それは綴り以前の問題)を解決した上で、國語の單音字の綴方は定めらるべきだ。が、今は應急の處置として、この稿に用ひるだけの綴方を表示して、この「發音」の項の説明に代へる。

東京語では「ザ行」「ジャ行」にも輕い「d」の要素がある(だから「d」の字を書いておいた)が、これは省略しても差支あるまい。ŋは語間に限る。ñは「ン」に當る。「m・n・ŋ」に通じて用ひる。但、「m・n」をも併せて用ひる。

a	i	u	e	o
ka	kyi	ku	ke	ko
sa	syi	su	se	so
ta	tsyi	tsu	te	to
na	nyi	nu	ne	no
ha	hyi	hu	he	ho
ma	myi	mu	me	mo
ya	i	yu	e	yo
ra	ryi	ru	re	ro
wa	i	u	e	o
ga	gyi	gu	ge	go
ñ				
g̃a	g̃yi	g̃u	g̃e	go
dza	dzyi	dzu	dze	dzo
da	dzyi	dzu	de	do
ba	byi	bu	be	bo
pa	pyi	pu	pe	po
kya		kyu		kyo
sya		syu		syo
tsya		tsyu		tsyo
nya		nyu		nyo
hya		hyu		hyo
mya		myu		myo
rya		ryu		ryo
gya		gyu		gyo
g̃ya		g̃yu		g̃yo
dya		dzyu		dzyo
bya		byu		byo
pya		pyu		pyo

三　語　法

單語の分類については、先づ、コトバの辭彙的單位・意義的單位・文法的單位の三つを分けて考へる。

第一に辭彙的單位としては、次のやうな例語が取り上げられる。それを概念的に分類すると、大體、三つになる。

（一）語原的單語
- （イ）語原的單語　〔例〕お・様・らしい（男らしい）・めく（春めく）
- （ロ）半語原的單語　〔例〕綺麗　妙　實　勉强　運動　斷然

（二）意義的單語
- （ハ）意義的單語　〔例〕日　お日様　男　男らしい　書く　勉强　勉强する
- （ニ）半文法的單語　〔例〕或る　その（その人）　きつと

（三）文法的單語
- （ホ）文法的單語　〔例〕は　も　だ　です　ない（行かない）

（イ）の語原的單語は普通に接辭と呼ばれるもの。それが接頭辭・接尾辭と分れる。簡單にいへば上接辭・下接辭。上接詞・下接詞でも差支ない。

（ロ）の半語原的單語は語基と呼ぶ。「お父さん」の「お」は上接辭、「父」は語基、「さん」は下接辭。

名詞以外の外來語は、すべて語基として取扱はれる。「勉強」「運動」「アナウンス」なども、そのまま本國では動詞なのだけれども、それを受け入れるときには、一旦、語基としてコトバのクラに藏つておいて、それからいろいろに活用する。純粹述詞（後述）の「する」が、それらの實質的意義を擔つて「勉強する」「運動する」「アナウンスする」等と働く。その「勉強すること」「運動すること」「アナウンスすること」などが、つひには「勉強」「運動」「アナウンス」等、語基の形のままで名詞になる。だから「勉強」も「運動」も、一方では語基として半語原的單語の中に、一方では名詞として純意義的單語の中に、前表の例語として入れておいた。「勉強する」も熟合した一つの動詞と考へられる。「斷然」なども、國語としては語基の取扱で、それに助詞の「と」をつけて用ひるのがほんとうだけれども、今日、久しく使ひなれてみれば、そのままの形でも副詞として用ひられる。「斷然と」も一つの副詞。

「綺麗」も語基。この類（妙・大切など）を特に形容語基といふが、それが純粹述詞の「だ」と熟して「綺麗だ」といふ一つの形容述詞になる。助詞（或は接尾語とも考へられる）の「に」を践んでは「綺麗に」といふ形容副詞になる。

擬聲語・擬象語なども語基として取扱はれる。そのうちで「ヒラリと」「ハッと」のやうに助詞を必ず践むものがある。あるいは「ハラハラ」「ドンドン」のやうに「と」をつけてもつけなくていいものがある。

かういふいろいろな種類の語基を、山田博士は、凡て一樣に副用語・裝定語とされたが、それよりも、むしろ語基

といふ一つのカタリケ（範疇）を立てる方がよくはあるまいか。さうして、「平らか」「ピカリ」などを形容語基、「に」「と」を助詞、「平らかに」「ピカリと」などを形容副詞、と私はしたい。但、なほ考へる。

（ニ）の半文法的單語は、專ら裝定的用法に立つものばかりで、これを裝詞といふことがある。後に說く冠詞・副詞の總稱として。

（ホ）の文法的單語は、日本語が添著語たる所以のもので、その形式から、一に添著的單語と呼ばれる。添詞とも呼ぶ。添詞は大別して二つに分れる。

添詞
- 陳述の力あるもの…………陳述添詞　〔例〕　だ　です
- 陳述の力なきもの…………補助添詞　〔例〕　は　も

文法上では、陳述添詞は「述詞」の中に入る。補助添詞だけを私の「助詞」とする。

第二に意義的單位としては、第一の辭彙的單位としての分類と內容は一致するが、その見方の角度・標準の相違から、自然に呼び名がちがつてくる。

辭彙的單位としての
- （イ）　語原的單語…………加工的單語　（い）
- （ロ）　半語原的單語…………素材的單語　（ろ）
- （ハ）　意義的單語…………自主的單語　（は）
- （ニ）　半文法的單語…………裝定的單語　（に）
- （ホ）　文法的單語…………補助的單語　（ほ）

（い）の加工的單語は、その意義を標準として、いろいろに分類される。

敬愛の意味を添へるもの　　お・御・さま・君

純粹の意味を添へるもの　　眞・生・素

その他、略す。普通の文法書にある。

（ろ）の素材的單語は、大體、感動語基・形容語基・動語基の三つに分けられる。

（一）感動語基　〔例〕　ああ　おお　ねえ　よう

（二）形容語基　〔例〕　綺麗　ハラハラ　ヒラヒラ

（三）動　語　基　〔例〕　運動　勉強　ドライブ

（は）の自主的單語は、意義を標準として、次のやうに分けられる。

名詞　　指示詞　　數詞　　時詞　　疑問詞　　動詞　　形容詞

名詞は更に固有名詞・普通名詞・抽象名詞・相對名詞などに分けられる。相對名詞といふのは「親・子」「夫・妻」又は「上・下」「前・後」「左・右」等。「親・子」の類を甲類とする。それには。例へば「某の親」とか「某の子」とかといふ風に、必ず領格補語を要する。「上・下」の類を乙類とする。それらは、例へば「も少し上」とか「もつと下」とかといふ風に、程度の副詞を取ることがある。

指示詞といふのは代名詞のことで、指詞とも呼ばれる。福井久藏教授「日本文法史」參照。代名詞といふ名稱は誤解を招きやすい。山田博士「日本文法論」及び鶴田常吉氏「日本口語法」代名詞の項を參照。私は指示詞を取る。

指示詞の本體は「こ・そ・あ」にある。これを「近稱・中稱・遠稱」とする。そこに相對的意義があるから、これも例へば「もつとこつちへ」等といふ風に、程度の副詞を取ることがある。

「これ・それ」等の「れ」は個詞を作る造語要素。

「これ・それ・あれ」「私・あなた」等は文法上では指示個詞。

「かう・さう」も、文法上では副詞だけれど、意義上の分類では、指示詞の中にはひる。その意義を標して、文法上では指示副詞といふ。但、この「かう」「さう」については、なほよく考へなければならない問題がある。

「この・その・あの」等も、勿論、指示詞のうち。但、文法上では冠詞として、特に指示冠詞といふ。

「どの」は後に說く疑問詞にはひる。文法上の冠詞としては卽ち疑問冠詞。

數詞の本體は「一・二・三……」等にある。だから、その相對的意義に係けて「もう一つ」「たつた三人」などと程度の副詞を取ることがある。

「第」は序數を作る上接語。

「一圓」や「三人」の「圓」「人」等は下接語。それを名詞と考へる說もあるが、國語意識では one yen や three men などの yen や men とはちがふ。民族心理が違ふのだ。

文法上では、數詞が個詞と副詞とに分用される。例——

一つに一つを加へる。　　數の個詞　　一つ下さい、お供をします　　數の副詞

時詞といふのは、時に關する語を集めて名づけたもの。文法上では個詞と副詞とに分用される。例——

今は菜種の花盛りです。　時の個詞　今行くよ。　時の副詞

昔を今になすよしもがな。　時の個詞　昔、昔、或る處に…………　時の副詞

大正十二年九月一日、關東地方に大地震があつた。　時の副詞

「時」には相對性があるから、程度の副詞を取ることがある。例――

たつた今　ずつと昔　ほんの今し方

次に、不定・不明の意義を持つてゐるものを集めて、疑問詞(又は不定詞)を立てる。それが文法上では個詞・冠詞・副詞に分用される。例――

なに　だれ　いつ　いくつ　疑問個詞

どの　疑問冠詞

どう　いつ(來た?)　いくつ(ある?)　疑問副詞

これはアクセント法に關係がある。即ち

ナニ　ダレ　イツ　イクツ　ドノ　ドオ(どう)

といふ風に、疑問詞は、その第一音節を高くする。後述アクセント法八一・二ペ參照。

動詞は自動詞・他動詞・被動詞・能動詞・使役動詞・被役動詞と分ける。

「れる・られる」「せる・させる」を「受身」乃至「使役」の助動詞(又は複語尾)といつて來た。ちがふ。それは受身・使役の動詞を作る造語要素だつた。

讀者諸君。文語の「る・らる」「す・さす」が、なぜ口語で「れる・られる」「せる・させる」になつたと思はれますか。普通に、口語の用言は文語の連體形が終止形を同化したのだと唱へられてゐます。では ruru > reru. suru > seru と u > e の變化があつたのでせうか。u > e ならば言下にうなづかれますが、u > e では多少の說明がいる。それができますか。諸君、金田一教授の「國語音韻論」二六〇ページを御覽ください。

文語では「れ・れ・る・るる・るれ」及び「せ・せ・す・する・すれ」と活用した。その活用は、或日、突如として生命を斷つた。或日突如といふことはあるまい。が、さう思はれるまでに、私は瞬間驚倒した。「打たれる」「打たせる」は「打たるる」「打たする」の變化ではない。實は「打たれ」「打たせ」の形(連用形)に、新たに動詞を作る造語要素の「る」が附いたのだ。そこに、口語の受身動詞・使役動詞の「打たれる」「打たせる」の新生があつたのだ。

このことは「れる」「せる」ばかりのことではない。すべての動詞の上二段活用の上一段化、下二段活用の下一段化も、みなそれでせう。いや、それどころではない。あるいは四段の上一段化もそれではないか。

飽く>飽きる	か	きル	く	く	け	け
楽(し)む>楽(し)みる	ま	みル	む	む	め	め
借る>借りる	ら	りル	る	る	れ	れ
足る>足りる	ら	りル	る	る	れ	れ

さうしてみると、上二段の「見(み)る」が古くは四段の「守(も)る・見(む)る」だつたといふ說なども搖いで來ます。むしろ「ま・

み・む・む・め・め」と四段に働く動詞があつて、それが後に上二段化したのではあるまいか。四段の古形は未然の助動詞「む・む・め」に遺つてゐる。さう考へても筋道が立つ。なほ後述二五・六ぺ參照。

「れる」は、單に受身だけの意味ではなくて、いはゆる自發や可能や敬語の意味などもあるから、特に、受身動詞といはないで、被動詞といつた。

Utare, Utase までが語幹(意義部)で、-ru が語尾(陳述部)です。

國語の自動・他動といふことは意義上の名目だから、例の受身になるとかならないとかの問題で、その分類を遠慮することはいらない。

「空を飛ぶ」の「飛ぶ」は自動詞。その前に、例へば「横切つて」といふやうな意味の動詞が略されてゐる。

「米洗ふ前を螢の二つ三つ」の「前を」の次にも同樣な趣きがある。單に螢が二つ三つ飛び交ふだけのものではない。

この類の「を」は、やはり、他動詞を導く助詞なのだ。

Serare-ru (爲(せ)られる)の語幹の -er- が省略されて、Sare-ru となつた。

Tatare-ru(立たれる)の Tatare- が Tate-(-ar- の省略)に約まつて、Tate-ru(立てる)といふ可能の動詞を生じた。

形容詞は、その語形成上の系統から次の三類に分ける。

形容詞
- 甲類〔例〕善い　善い・　善く
- 乙類〔例〕善からう　善かつた　善ければ
- 丙類〔例〕綺麗だ　綺麗な　綺麗に　綺麗なら　綺麗だらう　綺麗だつた

「綺麗だ」は、一般に「綺麗である」の約と考へられてゐるが、關東方言としては、むしろ「綺麗なり＞綺麗な＞綺麗だ」の變化ではないかといふ疑ひがある。關東方言で「ナ＞ダ」の變化は、例の「カキツバナ＞カキツバタ」を始めとして、その例語に乏しくない。あの「さうだんべえ」も「さうなるべし」から直接に來たもので、いふところの「さうであるべい」を經たものではあるまい。東京で「何々さうだ」といふ言ひ方を、今日、地方では廣く「何々さうな」といふ。「綺麗だこと!」といふ語法も、多分は「綺麗なこと」から來たのだらう。ともかく關東方言には「な＞だ」の變化が早く現はれたらしい。「平らかは語基で平らかなは冠詞なのか」といふやうな言ひ方でも、上の「で」と下の「な」とが相對してゐる。かやうなわけで、前表のやうな系列を立てた。專ら意味によるのだから、文法上の役目を顧慮する必要はない。文法上では、右の意味上の形容詞が次のやうに分れる。

形容述詞〔例〕【甲類】善い　【乙類】善からう　善ければ　【丙類】綺麗だ　綺麗だらう

形容冠詞〔例〕【甲類】善い　【丙類】綺麗な

形容副詞〔例〕【甲類】善く　綺麗に

第三、文法的單位としての分類は、その文中における語の相關關係を第一義として行はれる。

「文」とは何ぞや。

ここに一個渾成の「文」がある。それを一旦「內省」の鏡に照らすとき、そこに二つの概念が照らし出される。一つをA、一つをBとする。A＜＞B。が、それでは「文」ではない。文は、そのAとBとが綜合されたものだつた。即ちA＝Bが「文」たつだ。その「綜合する」ことを「陳述する」又は「判斷する」といふ。

ここにAとBとは相對(あひたい)してゐる。その相對してゐるかたちを人間界の主客の對坐になぞらへて、Aを主格概念、Bを客格概念といふ。主格概念をあらはす語を主語、客格概念をあらはす語を客語といふ。さうして陳述をあらはす語を述語といふ。

正成は忠臣だ。

この文で、正成は主語、忠臣は客語、だは述語。では「は」は如何。

「正成」といふときには、正成一人、即ち絶對で、主も客もない。それを「正成は」といへば忽ち正成と相對する或るものを豫想する。その或るもの即ち客格が現はれて、正成も同時に主格となつた。

ところで、かやうに主客の分離が行はれると、そこに必ず合一を要求する。否、主と客と相對したとき既に合一は了つてゐるのだ。けれども、その端的瞬間の事實でも、それをコトバで言ひ表はすときには經過を要する。

「正成＜＞忠臣」の關係(即ち分析)が「正成は」で、その綜合たる「正成＝忠臣」の關係が「忠臣だ」となる。

「は」は實に分析(＜＞)をあらはす、正に、綜合(＝)をあらはす「だ」と呼應してゐる。は——だ、この關係を宣長が「係(かか)り・結び」といつた。三七ページ※參照。

「は」は、かやうなわけで、必ず下に判斷を豫想する。これが即ち、

柳は綠。　花は紅。

等と、述語の「だ」が略されて文を成す所以だつた。

私が行く。

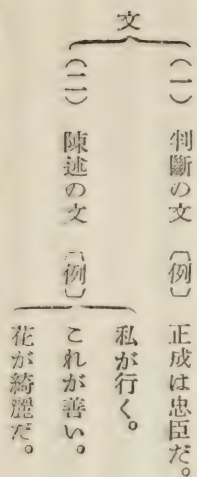
この文では、私が主語、行くが客語、述語はない。陳述の意味は、その「行く」といふときの「語氣」であらはされる。その語氣を「結びの語氣」といふ。それを筆寫の上では句點の「。」であらはす。實際の言語生活では、多くは「私が行くヨ」「私が行くワ」といふ風に、それぞれ適當なテニハをつけていふから、一さう陳述の意味は明かにされる。

正成は忠臣だ。

私が行く。

右の二つの文は、共に「A＝B」の式であらはされる。即ち「正成＝忠臣」「私＝行く」と。「正成」「忠臣」は個體概念。個體概念をあらはす語を體言といふ。體言を私は「個詞」と呼ぶ。「行く」は屬性概念。屬性概念をあらはす語を屬性言（又は現象言）といふ。屬性言には動詞・形容詞・形容詞基の三つがある。但、形容詞基といふことについては、なほ別に考へなければならない、前述の通り。

文には、個體概念を客語とするものと、屬性概念を客語とするものとの二つがある。それを假に「判斷の文」「陳述の文」と呼び分ける。

文
- （一）判斷の文　〔例〕 正成は忠臣だ。／私が行く。
- （二）陳述の文　〔例〕 これが善い。／花が綺麗だ。

「花が綺麗だ」は、實質的には陳述の文で、形式的には判斷の文だ。故に准判斷の文として取扱はれる。

判斷の文の主格を判斷の主格といふ。陳述の文の主格を陳述の主格といふ。

「は」は判斷の主格につくことを原則とする。陳述の文につくときの「は」は、その主格の概念を他の概念と峻別するための「は」か、又は、その陳述は判斷の語氣を含むものだ。

この井戸の水は冷いね。　火は熱い（ものだ）よ。

「が」は、陳述の主格につくことを主として、判斷の主格につくこともある。

私が正成の妻でございます。

さて次のやうな句がある。

私が行く時、

右の「時」の修飾句の「私が行く」は、前の文の「私が行く」と、その語の組み立ては全く同じだけれども、その心持は非常に違ふ。その違ふ心持を表示して見ると

$A = B$　　私が行く。

$A' > B'$　　私が行く時、

Aの主格概念に對して、A′を主體概念といふ。Bの客格概念に對して、B′を屬性概念といふ。

Bは「陳述して」ゐる。それに對してB′は「記錄して」ゐるといふ。

意義上の分類で同じ動詞の「行く」だけれども、文法上では、Bを述詞、B′を冠詞といふ。特に意義を標して動冠詞といふ。いはゆる動詞の連體形は凡て動冠詞。これに准じて形容詞の連體形も形容冠詞になる。その基本形（即ち終

止形)は形容述詞。かやうにして、文法上では次のやうに考へられる。

述詞 ┌ 動述詞〔例〕行く。
　　 └ 形容述詞〔例〕善い。

冠詞 ┌ 動冠詞〔例〕行く・
　　 └ 形容冠詞〔例〕善い・

以上のやうな考へ方の道を歩いて、遂に私は五品詞を立てた。請ふ、その助詞の地位を見よ。

(一) 個詞……………文法的作用なき語
(二) 述詞 ┐ 主用語
(三) 助詞 ┘
(四) 冠詞 ┐ 修飾用語
(五) 副詞 ┘

（主用語・修飾用語）── 文法的作用ある語

（文法的作用なき語・文法的作用ある語）── 文法的單位としての語の分類

第一、個詞は、一般の體言に當る。それを個詞といつたのは、個體概念をあらはす語といふ意味でフト頭に浮んだのだけれども、その背後には、山田博士の體言論が潜んでゐる。

宇宙の森羅萬象如何なる事物にてもあれ、吾人の意識に於いて、一の獨體として認識せらるゝものは、之を單語にてあらはす時皆體言の資格を有す(日本文法論一七六ぺ)。

個詞は、先づ、實質個詞と形式個詞とに大別される。

個詞 ⌒ 實質個詞 〔例〕 富士山 山櫻
　　 ⌒ 形式個詞 〔例〕 こと それ これ さう 風(ふう) の

形式個詞には實質的意義がないから、それを他の方法で補充しなければならない。

花がもう咲くさうです。　こんな風になさい。

それはありがたいことです。　あれは蟲が鳴くのだ。

「それ・これ」などは、形式個詞の中で特に指示個詞といふ。指示個詞の意義は前後の叙述で補充される。

第二、述詞は山田博士の用言（又は verb）に當る。一般には、用言を動詞・形容詞の總稱とするのが普通だけれども、山田博士の用言には、動詞・形容詞の外に所謂助動詞も含まれてゐる。

一たい體言・用言といふのは、實體言と現象言（或は主體言と屬性言）ともいふべきほどの意義上の名目だ。佛教哲學の體・用（又は體・相・用）にかりたもの。體のことば・用のことばといつた昔の連歌道の使ひ方もさうだつたし、それを文法上で始めて用ひた契沖の使ひ方もさうだつた。今日の文法書では、吉岡郷甫氏の「文語口語對照語法」に、その意味が一番ハツキリ説いてある。簡單に、その用言の定義だけを引いておく。

> 用言と申しますのは、實體の屬性を表す語で、之に、(1)變化する屬性即ち動作を表すものと、(2)變化しない屬性即ち有様を表すものとの二通りあります。(1)は動詞(2)は形容詞であります。（文語口語對照語法一七ぺ）

一方、東條義門から發して權田直助に至り、更に現代の岡澤翁に繼がれてゐるものは、いはゆる活用の有無によつて體用を區別する。

體言トハ、言ニシテ活用ナキモノナリ。
用言トハ、言ニシテ活用アルモノナリ。（言語學的日本文典一七七－八ペ）

山田博士の日本文法論に至つて、用言の意義は全く新しい生命の息を吹き込まれた。即ち——

用言とは、屬性概念と同時に陳述の力を持つてゐるもの、否、陳述の力さへ持つてゐれば、たとひ屬性概念は殆ど認め得られないやうなものでも、それで立派な用言だとする。

用言特有の現象は實にこの陳述の力に存す。この故にその屬性甚だ廣汎なる場合又は殆ど屬性の認むべからざる場合にても、陳述の力といふ用言特別の力を有するものは用言たる資格十分なりといはざるべからず。（日本文法講義第四八節）

だから、所謂助動詞も、當然、用言の中にはひる。

動詞・形容詞は、陳述の力の上に屬性概念を兼ねてゐるのだから、

陳述の力＋屬性概念＝動詞・形容詞

の式であらはされる。さうして廣く用言は、

陳述の力をあらはす語（即ち動詞・形容詞・助動詞を含む）

となる。用言の意義、ここに至つて徹した。

ところで、用言といふ語は、もともと、意義上の名目（上述）だから、おのづから動詞・形容詞だけの總稱に用ひたくなる。木枝教授「文語法精說」四四ペ參照。そこには惜しくも「これは暫らく舊來の文法系統によつた」とある。

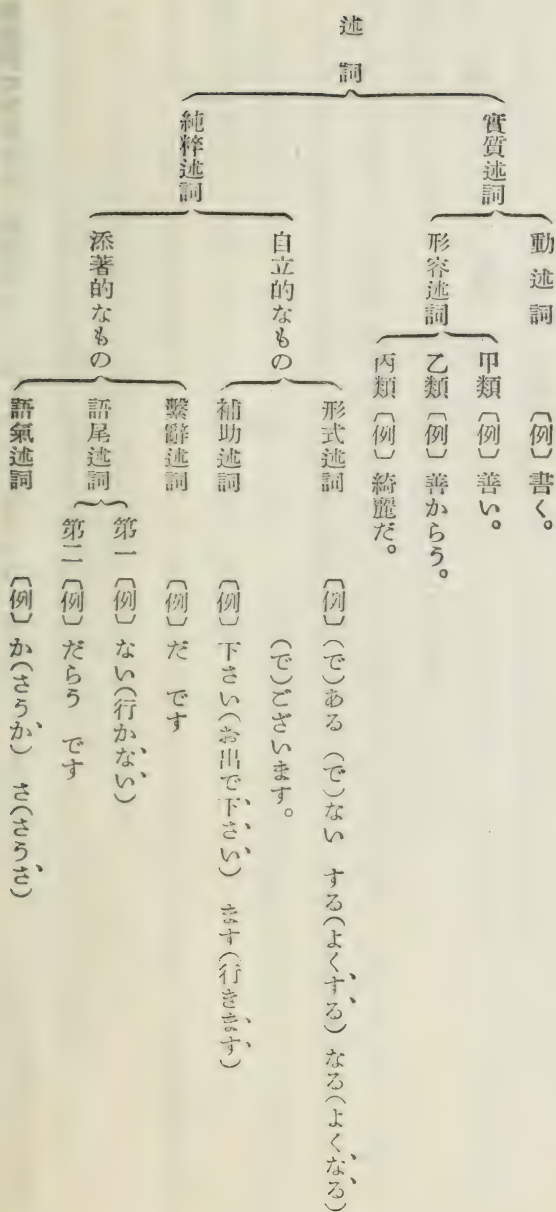
新術語の濫造は嚴に警めなければならないが、それも事と程度とによる。山田博士の用言の新定義くらゐになると、

もう、その名目を改めないのが却つてムリではあるまいか。

用とは思想の運用なり。（日本文法論一六二ぺ）

それは古來の考へ方と餘りにも懸け離れてゐる。

そこで、敢て潜越を顧みず、假に述詞（又は述言）として、それに對する體言をも個詞としておいた。

述詞は、次表のやうに分類される。

動述詞の語形分析　動述詞は、上述のやうに「陳述の力＋屬性概念」のものだとすると、その心持が動述詞自身の語形の上に現はれてをりはしないか。さう考へて、いはゆる語尾が陳述の力の宿るところ、語幹が屬性概念（卽ち意義）の宿るところだと知ることができる。故に語幹を意義部として、語尾を陳述部と名づける。いな、陳述部が動述詞の本體であつて、意義部は、單にそれに屬性概念を補充するものに過ぎない。ここに考へ至つて始めて語尾を一個の「述詞」として立てた。述詞の中の純粹述詞、純粹述詞の中の語尾述詞として。

例を「行く」にとる。それは動述詞としての「行く」も動冠詞としての「行く」も全く同音だから、そこには特別な陳述部がないやうに思はれる。が、なほ、よくよく考へて見ると、動述詞としての「結びの語氣」が宿るところ（前述四ぺ參照）は語尾の「u」だから、その「結びの語氣」を宿した「u」が卽ち陳述部となる。讀者諸君。この「u」は一個の語尾述詞－純粹述詞－述詞です。それが肯定して頂けますか。

日本中で、山田博士だけは賞めて下さるでせう。なぜならば、これは山田博士の用言論を大地の底まで踏み拔いたものですから。

いや、まだ、大地の底を踏み拔かなければならない。それが、私の語氣述詞です。

雪が降る。

雪が降る！

雪が降る？

「！」も「？」も「。」とひとしく立派な陳述活動です。さういふ、いろいろな「結びの語氣」をあらはすものが「か・よ・

ね・サ」などだとすれば、それも一種の語尾述詞ではないか。もちろん、それは他の語尾述詞のやうに、本來、實質的な述詞から出たものではない。けれども、それだからといつて「語氣」といふ陳述活動に目を掩つてはならない。我等のコトタマは、さういふ、秋空に浮ぶ片雲のやうな言語材料を捕へ來つて、いろいろな、微妙な、語氣の陳述活動を表現しようとしてゐるのだ。そこを見て、私は、この「か・よ・ね・サ・ワ」等の一類のテニハを「語氣述詞」と立てた。それには「。」「！」「？」等に當る「純粹語氣」をも含めて。

ああ、ここに至つて始めて山田博士の眞實の弟子たることができた。

コトタマに見えることができた。

音聲日語法の礎が、金輪を越えた空輪無邊の極みに覗ひ鎖められた。

動述詞の形態分類　動述詞が肯定・否定、その他、一切の陳述活動をするのには、その陳述部に各種の語尾述詞や語氣述詞を取る。そのとき、結合の媒介として意義部と陳述部との中間に或る母音を添加することがある。その添加の形式の種類によつて、動述詞の形態分類を企てる。これがいはゆる「活用の種類」を立てる意義だと考へる。

さて、動述詞の陳述部の成立には、次の四つの形式がある。

（一）語尾述詞のまま　〔例〕　Kak-u（書く）の u

（二）添加母音を介する語尾述詞　〔例〕　Kak-a-nai（書かない）の -a-nai

（三）添加母音を介する補助述詞　〔例〕　Kak-i-mas（書きます）の -i-mas

（四）添加母音と助詞との熟語形　〔例〕　Kak-e-ba（書けば）の -e-ba

右の(四)の「-e-ba」は、恐らく、元來は中間に -ra- があつたのだらうとおもふ。文語の「書かば」の轉。その「ば」は假定の語氣を確めて「書けば」と熟してゐる。

さて、第一の語尾述詞のままで陳述部を成すものは、肯定の陳述と命令の陳述とだけ。それに未來形をも准じて入れる。

肯定の陳述をなす語尾述詞には、次の三種がある。

(一) Kak-u(書く)　Hanas-u(話す)　等の「u」

(二) Oki-ru(起きる)　Otsyi-ru(落ちる)　Uke-ru(受ける)　Tate-ru(立てる)　等の「ru」

右の類では「ru」が陳述部。なぜか。これは私の一段活用動詞新生論による。前述「れる・せる」の項十三・四ペ參照。松岡靜雄氏は、その第二活用形原形說(日本言語學)によつて、一段活用動詞の復活(又は變化)論を唱へられた。原形說は別の問題として、その結論は上述の小見と一致する。

(三) S-uru(爲る)　K-uru(來る)　等の「uru」

これは古い文語の連體形を借用したもの。だから特別な形式で、その語例も僅に二つしかない。その活動狀態も不安定だ。

以上、肯定の陳述部に三類あるから、それと常に結合する約束を持つてゐる意義部にも三類ある。即ち——

第一類　〔例〕　Kak-　(書)

第二類　〔例〕　Oki-　(起き)　Uke-　(受け)

第三類　〔例〕 S-　（爲）　K-　（來）

次に、否定の陳述部を尋ねる。否定をあらはす語尾述詞は「ナイ」だ。それが、意義部に附く場合の結合形式を見ると、三種ある。即ち右の

第一類へは「a」を介する　〔例〕 Kak-a-nai

第二類へはそのまま　〔例〕 Oki-nai　Uko-nai

第三類の｛一へは「i」を介する　（甲）　〔例〕 S-i-nai
　　　　 二へは「o」を介する　（乙）　〔例〕 K-o-nai

ここにおいて意義部の種類も開いて三類四種となる。

第一類　〔例〕 Kak-　（いはゆる五段活用）

第二類　〔例〕 Oki-　Uko-　（いはゆる上下一段活用）

第三類｛甲　〔例〕 s-　（爲る）　〔一語〕　（いはゆる上二段活用）
　　　 乙　〔例〕 k-　（來る）　〔一語〕　（いはゆる變格活用）

このほか、希望・推量・假定・命令・決意・質問・疑惑、その他、あらゆる陳述活動を行ふために、いろいろな語尾述詞・語氣述詞・補助述詞・等を附けてみて、結局、動述詞の意義部の形式は、右の三類四種を出でないことが知られる。左に、肯定以下、陳述活動の代表的なものを一表にまとめて掲げる。第一種（五段）を第一類、第二種と第三種とを合せて第二類（五段以外）とする。

第一種	第二種	第三種 (甲)	第三種 (乙)
Kak	Okyi	s	k
a-nai*	nai*-mai	yi-nai*-mai	o-nai*-mai
yi-tai*-mas×	tai*-mas×	yi-tai*-mas×	yi-tai*-mas×
u*-mai	ru	u-ru*	u-ru*
e-ba	re-ba	u-re-ba	u-re-ba
e-yo	ro	yi-ro	o-i
oo	yoo	yi-yoo	o-yoo

* 第二語尾述詞の「でせう」「だらう」は、肯定・否定・希望の語尾に附く。×「ます」には「でせう」だけが附く。

【注意】「まい」は、文語では一樣に基本形に附くが、口語では右のやうに分れて附く。それを「すまじきものは宮仕へ」の格で「すまい」とはいはない。但、方言ではいふところがある。

第一種の第六段の「oo」は、元來、添加母音の「a」と「u」とが結合したもので、amu>au>oo と、發音上、全く融合してゐる。この點、山田博士の非五段活用說（日本文法講義一〇二ペ・日本口語法講義七六ペ參照）には遺憾ながら承服することができない。

第二・三種の第六段の「yoo」の「y」は、古い「r」の變化したものではあるまいか。即ち、ram>rau>yoo となつたものではないかといふ疑ひがある。r—y は極く自然な相通で、例の「あらゆる—あらるる」「いはゆる—いはるる」などの格。もし果してさうだとすれば、その歷史的假名遣は「やう」でなくてはならない。

第三種の乙の第五段の「ko-i」は「ko-ro」の變化で、即ち koro>koyo>koi ではないかと思ふ。從來は「來よ」の「よ」

や「起きろ」の「ろ」などを助詞として取扱はれたが、實は語尾述詞の一部分ではあるまいか。

以上の考へ方に基づいて、これをカナで書き表はしてみると、次のやうになる。但、第二類を上・下の二つに分けたのは、綴音文字のカナによる結果。

			打消形	連語形	基本形	假定形	命令形	未來形
第一種		五段活用	書	カ	キ	ク	ケバ	ケ	コオ
第二種	（甲）	上一段活用	起	キ	キ	キル	キレバ	キロ	キヨオ
	（乙）	下一段活用	受	ケ	ケ	ケル	ケレバ	ケロ	ケヨオ
第三種	（甲）	上二段活用	（爲）	シ	シ	スル	スレバ	シロ	シヨオ
	（乙）	變三段活用	（來）	コ	キ	クル	クレバ	コイ	コヨオ

右は理想的な形式であつて、語によつては完全に活用しないのがある。それらを不完全活用といふ。

		打消形	連語形	基本形	假定形	命令形	未來形
不完全五段活用	有	―	リ	ル	レバ	―	（ロオ）
不完全上一段活用	足	リ	リ	リル	リレバ	―	（ヨオ）
不完全下一段活用	立	テ	テ	テル	テレバ	―	―

右の「立てる」は可能の「立てる」で、他動詞の「立てる」ではない。

「有る」には「有らない」がない。だから實際は「リルレロ」の四段だけれども、不完全を標して五段に攝しておく。私は四段に立てたい。括弧内の「ロオ」は活動力がよわいことを示す。次の「ヨオ」も同斷。

ワ行五段活用に注意すべきことが二つある。それは、第一——

思(オモ)	ワ	イ	ウ	エバ	エ	オオ

の基本形を「オモオ」と長音に發音しないこと。それを長音に發音する地方も廣く存在するけれども、標準語としては「オモウ」の形をとる。又、序ながら、文語の訓讀では、

舞(マ)	ワ	イ	ウ	エバ	エ	オオ

の基本形を「モオ」と長音に發音するが、口語の標準的な發音形式としては「マウ」をとる。東京も、京都も、實際の發音でさうだ。この類には、なほ「買ふ、逢ふ、洗ふ、笑ふ、行ふ」等がある。第二——

言(イ)	ワ	イ	(ユ)ウ	エバ	エ	オオ
結(イ)	ワ	イ	(ユ)ウ	エバ	エ	オオ

の二語が、基本形では「ユウ」となること。現代の東京方言では、右の「言ふ」「結ふ」の發音が全く同じになつてゐる(拙稿「東京方言の動詞活用について」音聲の研究第二輯)が、將來は果してどうなるものか。又、標準語としてはどういふ形を採用すべきか。これは問題として提出しておく。

以上の二ケ條を、單音字で書きあらはすと次のやうになる。さうして、左の(一)(二)の注記を必要とする。

Omo(w)	I(w)
a	a
i	i
u	u
e-ba	e-ba
e	e
oo	oo

（一）（w）は、添加母音の a 以外では落ちる。

（二）（I-u）は yuu と發音する。

なほ一般の連用形を連語形とした。それは、この形は用言に連るばかりでなく、廣く體言にも連るから。即ち——

乘り手　　飮み物　　取り柄

この形から多くの名詞を生じたのは、例へば、手洗ひ桶＞手洗(たら)ひ＞盥(たらひ)のやうに、その下の體言を略したものだらう。して見ると、この形から體言に續くことは本來の一性質だといはなければならない。

いはゆる音便形は、動述詞が述助詞の「て」「た」と全く熟合した形だから、それを別な陳述活動の一語形として見る。それに三類四種ある。例を「書く」「漕ぐ」「飛ぶ」「立つ」にとる。

第一類	甲	Kaite	Kaita	Kaitara	Kaitaroo	（いはゆるイ音便）
	乙	Koide	Koida	Koidara	Koidaroo	
第二類		Tonde	Tonda	Tondara	Tondaroo	（いはゆるン音便）
第三類		Tatte	Tatta	Tattara	Tattaroo	（いはゆるッ音便）

形容詞系統の解消と再建　いはゆる形容詞の活用といふことは、わが日本文法學の第一祖富士谷成章翁以來の傳統だけれども、私は、一蹴する。例を「善い」にとる。それを次のやうに處置する。

善い。　　形容述詞甲類

善い・　　**形容冠詞**

善く　　　　形容副詞
善ければ　　形容述詞乙類の假定形
善からう　　形容述詞乙類の推量形
善かつた　　形容述詞乙類の音便形

即ち、形容述詞甲類（いはゆるク活シク活の形容詞）には活用がない。うらになる。但、形容述詞乙類・丙類には活用がある。

かくて、一旦、從來の形容詞系統を解消した上で、更に、意義と形態とを標準として、形容述詞・形容冠詞・形容副詞・形容述詞乙類等を一系列に編纂することは差支ない。例へば——

善い　善い'　善く　善ければ　善からう　善かつた

なほ一六ペ參照。これはアクセント法で必要とする。

形式述詞は、一方で「有る」「無い」「爲る」「成る」等と活動してゐるが、一方では、その實質的意義を失つて、單に肯定・否定の意味をあらはす准繋辭述詞になるか、又は、廣く自動的・他動的の意味を有する實質述詞を作る基礎になるかのもの。

「ではある」「でもある」はいふが、實際のコトバで「である」とは決して言はない。實際に使はない（又は使ひ得ない）言葉は書かない主義で、私は口語文に「である」を廢した、昭和四年九月以來。國語認識第二號五ペ參照。

「であります」も、特殊語の「軍隊ことば」としては鎮撤する。その道での「特殊の用」をなしてゐるから。が、それを

普通の講演「おはなし」に持つてくることはどうだらう。その「おはなし」が「普通」でないといふ印象を與へるのが惜しい。それに、語尾を「であります」にすることは、その句の全體の調子を上ずらせる。いはゆる音調曲線が長い弧形になつて、頭腔の共鳴を導き易い。ラヂオでは、ミクロホンを通して、それが一そう鑛物性化する。それに、自然「何々で、あります」となりがちだから、大切な「何々」よりも「で、あります」の方が耳立つて、却つて理解を妨げることがある。普通の講演に「であります」を使ふことは、時代の言語感覺の上からは落第。

「ではない」「でもない」「ではありません」「でもありません」「ではございません」「でもございません」はいふ。

「亡くなる」「よくなる」又は「よくする」「ビクビクする」等の「なる」「する」が形式述詞の例。

補助述詞は、常に動述詞の連語形に連つて、いろいろな陳述活動を起す。準語尾述詞ともいふべきもの。敬意を添へる補助述詞には、日常の言語生活の慣用から、特に熟語成句が多い。例——

お話し申し上げます。

お出で下さいまし。

繫辭述詞は判斷の文を作るもの。

第一語尾述詞は既に說いた。

第二語尾述詞の「だらう」「でせう」は、繫辭述詞の「だ」「です」の活用形から獨立して、別に自由な陳述活動を營む。

例へば——

行くだらう　（行くだ——方言）

行くでせう　（行くですも方言——漱石の小説を見よ）

善いだらう　（善いだも方言）

善いでせう　（善いです——これはおひおひ行はれてゐる）

語氣述詞は、山田博士の終助詞に當る。これを助詞から引き離して廣義の述詞（verb）に入れたことは、私の冒險です。なほよく考へて別に一稿を草するつもりです。

第三、冠詞は、その用法が專ら個詞の裝定に固定したもの。

例を「或る」「その」にとる。

「或る」が「在る」から來たことは松下博士の說（改撰標準日本文法參照）に從ふ。

或　「あり（有）の連體形、世ニあるノ意」ソレト定マラヌ、又ハ、知ラヌ物事ヲ指シテ云フ語。然(サ)ル。某(ソレ)ノ。神代紀、上十六「一書(アルフミ)曰」孝德紀、白雉元年二月「一所(アルトコロ)」（大言海）

それは全く a man 等の a（不定冠詞）と同じ意味合ひのものではないか。

「重成と其の妻」の「其(そ)」は「其(そ)れ」の意味で指示個詞（代名詞）だけれども、もし「その妻の名はなんといつたか」といへば、その「その」は恰も定冠詞の the に當る。

定冠詞にしろ、不定冠詞にしろ、ともかく「或る」「その」を冠詞と見るのに不可はあるまい。

なほ、いろいろな冠詞がある。假に彙類して名を附ける。

その　この　例の　　定冠詞

或る　ひとりの　　不定冠詞
我が　　領格冠詞
その　この　あの　　指示冠詞
どの　どんな　　疑問冠詞

右は一括して形式冠詞といふ。

いはゆる形容詞の連體形は、形容冠詞甲類とする。それから「綺麗な」の類を、形容冠詞乙類とする。

美しい‐　高い‐　深い‐　優しい‐　　形容冠詞甲類
綺麗な　靜かな　平らかな　斷然たる　　形容冠詞乙類

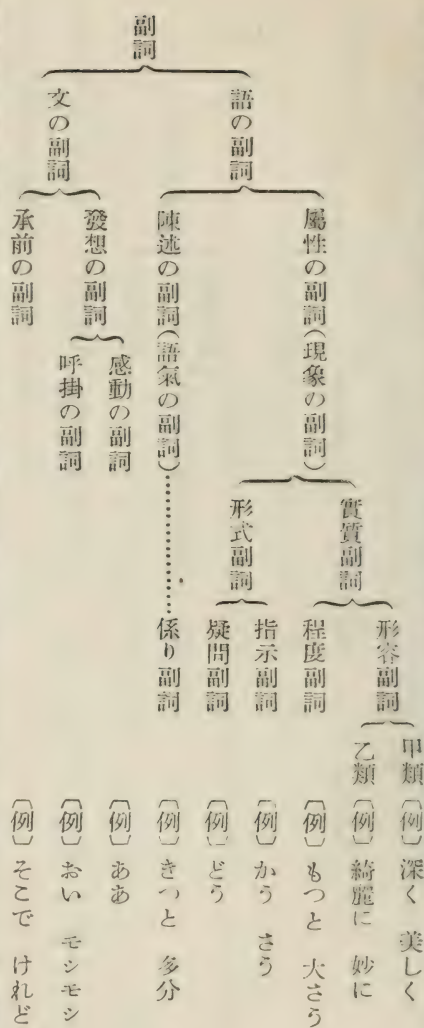
右の「綺麗な」「斷然たる」等は、前代の形容述詞「綺麗なり」「斷然たり」等が亡びてから、その一活用形が斷片的に殘つてゐるので、今日では、形容冠詞といふより外には、その取扱の道がない。

いはゆる動詞の連體形は動冠詞。

動冠詞・形容冠詞を總稱して實質冠詞といふ。前の形式冠詞に對する。

冠詞に當る一品詞を立てることは、鶴田常吉氏の日本口語法（大正十三年十一月刊）の首唱に據る。鶴田氏は連體詞、松下博士は副體詞、畏友湯澤幸吉郎氏は連詞、同氏「口語法精説」五一・六ぺ參照、私は冠詞。その名前はいづれでもいい。私は古來の「冠りことば」から取つた。Article とAdjective とを兼ねる。

第四、副詞。 冠詞に對して副詞を立てる。Adverb に當る。

副詞の分類と、その語例とを表示しておく。山田博士の副詞（副用語・裝定語）の分類と比較して考へて頂きたい。

副詞の系統的な分類を考へるのには、私が助詞と見做した「及び」「並に」の取扱ひ方を先決問題とする。

屬性の副詞と陳述の副詞とについて。

ハッと驚く。

アッと驚く。

右の「ハッと」「アッと」は、その驚くありさまを形容するもので、それが屬性の副詞。あるいは現象の副詞とも呼ばれる。

これからはきつと注意いたします！

右の「きつと」は、その注意するといふ「決心」をあらはす語氣（それが「！」で示されてゐる）を表現してゐる。それが陳述の副詞、卽ち語氣の副詞。助詞の「係り助詞」に對稱して「係り副詞」と呼ぶ。

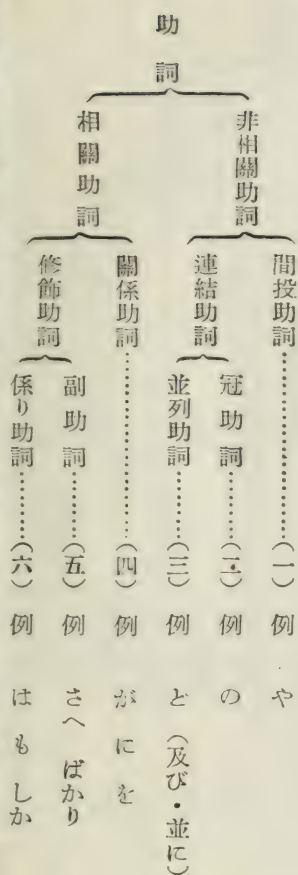
　これからはよく注意いたします。

右の「よく」と比べて見れば、現象の副詞と語氣の副詞との違ひ目がよく分るでせう。つまり、語氣の副詞は、例へば「ウン」といつて案を拍く、その案を拍くことを「コトバ」で言ひ表はしたもの。

第五、助詞。いはゆる助辭。それを私は添着的單語の意味で添詞といつた。その添詞のうちから、陳述の力あるもの（陳述の添詞）を述詞の中に入れた。殘る補助添詞（陳述の力なきもの）が卽ち私の「助詞」だ。前述九ペ參照。

私は、助詞を文法上の「主用語」と見た。前述一九ペの表。

助詞の分類について、次に私案の一表を掲げる。

- 助詞
  - 非相關助詞
    - 間投助詞……（一）例　や
    - 連結助詞
      - 冠助詞……（二）例　の
      - 並列助詞……（三）例　と（及び・並に）
  - 相關助詞
    - 關係助詞……（四）例　が　に　を
    - 修飾助詞
      - 副助詞……（五）例　さへ　ばかり
      - 係り助詞……（六）例　は　も　しか

關係助詞は山田博士の格助詞に當るが、その中から「の」「と」を除いたから、その名を當てることを遠慮した。

修飾助詞は「語の副詞」に相當するもので、副詞と助詞とで次のやうな對應をなす。

語の副詞 ｛ 現象の副詞……………副　助　詞 ｝ 修飾の助詞
　　　　　 語氣の副詞＝係り副詞…係り助詞

故に「修飾の助詞」は「廣義の副助詞」といふべきもの。

接續の助詞については、少し考へがあるので、特に右の表からは除いておいた。が、右の助詞（六助詞）全體と對立して置かれることは、山田博士の最近の說（日本文法要論）の通りだらうと思はれる。

以上で、私の五品詞に一通り觸れた。さて讀み返して見ると空恐しい。讀者諸君は、どうか、爛爛たる批判の眼を見開いて讀んで頂きたい。さうして、私の屍を踏み越えて、新しい口語法の道を開いて頂きたい。私も、誓つて、明日の私を新しくする。

※　このことは、宣長の後、久しく、その眞義が學界に隱れて顯はれなかつた。わが山田博士に至つて、幸に、再び天日の光を仰ぐことができた。私は、山田博士の「日本文法論」六三九ページ終の二行目から六四〇ページ十一行目までを學生に讀んで聞かせることを毎年の行事としてゐる。それが今年、昭和九年一月號「國語研究」所載の山田博士講演筆記の一節（二四、五ペ）を拜見したときには、ほんとうに、巍峨たる鐵巖の大山が私の眼前に聳立したやうに感じた。

四　アクセント法

私は子供のために、かつて發音讀本（大正十五年三月富山房刊）といふ小さい教材を編んだことがある。その第二册はアクセ

ント讀本とするつもりで、なほアクセント辭典の編纂にも志した。ところが、どうもアクセントの本質について疑問があつたから、從つて、その表記法が定らず、從つてまた、これを活字にすることができなかつた。然し、その間にも、築地を本據として、日本橋・京橋の下町方言を中心に、アクセントの採集につとめた。そのカードが約四萬二千枚、その整理はまだ完成しないが、それでも五年の間、一語一語と採集してゐるうちに、おのづから若干の法則めいたものを氣附いたので、ともかく昭和五年の夏休みに、一册のノートに書きつけておいた。それがこの稿の下書きです。

これよりさき私は、國語のアクセント成立の契機を一種の「輕い glottal stop」と見て、そのことを「音聲の研究」第三輯（昭和五年三月音聲學協會刊二四四ページ參照）に寄稿した。さうして、このことを實驗的に調査して見たいものだと思つて今日に及んだが、これも望みばかりで實現することができないでゐる。

右のやうな次第ですから、この稿も、どうか、そのおつもりで讀んで頂きたい。今日、最も廣く行はれてゐる純高低觀（特に佐久間博士の三段觀）に立つアクセント說は、既に讀者諸氏の熟知してをられるところと思ひますから、この稿では、その說の紹介を略して、すぐに小見の告白に入ります。

アクセント私觀　私は、高低觀の上からは、高・上・中・下の四段觀を立てる。譬ふれば、それは、音階のド・レ・ミ・ファ）に似たもの。そのファ）が高、そのミが上、レが中、ドが下。して、その中・下の間を總ねて低とする。と、高・上・低といふ一種の新三段觀が成立する。この新三段觀の高低觀だけで、二音節以下の語のアクセントは說明される。今、先づ次のやうな二つの記號を約束する。

●　高　　一　上

以下、例を示す。但、無記號は低に當る。

ハナ(花)　ハナ(鼻)　ハナ(發端)　ハシ(橋)　ハシ(端)　ハシ(箸)

右に準じて、一音節の語も次のやうに見立てられる。

ハ(葉)　ハ(齒)　キ(氣)　キ(木)

三音節以上の語では、上の高さに二種を認めて、一つは次の音節へ「平らに續くもの」と、一つは、その音節の母音が急に「斷ち切れるもの」とする。その斷ち切れるといふのが即ち前述の輕い glottal stop (假に「聲堰き」と譯す)で、その心持を假に「?」であらはすと、例へば次のやうになる。

ワタシ(私)　ワタシワ(私は)　ハナシ?(話)　ハナシ?ワ(話)　ヤマザ?クラ(山櫻)　ヤマトゴ?コロ(大和心)

前のハ(齒)やハシ(橋)やハシ(箸)の類なども、右の意味では次のやうに表はすべきものだとおもふ。

ハ?(齒)　ハシ?(橋)　ハ?シ(箸)

そこで、高低の關係を暫く捨象して見ると、以上のアクセント形式は次のやうに書きあらはすことができる。

ハ(葉)　キ(氣)　ハナ(鼻)　ハシ(端)　ワタシ

ハ?(齒)　キ?(木)　ハナ?(花)　ハ?シ(箸)　ハシ?(橋)　ハナシ?(話)　ヤマザ?クラ(山櫻)

ヤマトゴ?コロ(大和心)

けれども、その背景には新三段(高上低)の高低の關係が見通されてゐて、いはゆるアクセントの型と式とを形成する。そのことは次項で述べる。

さて、この「ʔ」を用ひる表記法は、右の諒解のもとに、特に國際音字書きに似合はしい。

haʔ(歯)　kiʔ(木)　hanaʔ(花)　hasyiʔ(橋)　haʔsyi(箸)　yamazaʔkura(山櫻)

カナ書きでは、次のやうな楔形(くさびがた)の符號を用ひたい。それを「こゑぜき」の起る音節の前につける。

ˈハ(歯)　ˈキ(木)　ハˈナ(花)　ハˈシ(橋)　ˈハシ(箸)　ヤマˈザクラ(山櫻)

私は、國語のアクセント現象における輕い「こゑぜき」を「アクセント契機」と稱し、右の楔形の符號を假に「くさび」と呼んでおく。

以下、凡て右の「くさび」を用ひる形式で表記する。但、アクセント形式における高低觀を無視するのでは決してない。その心持を表はすために、第一音節の低の高さに次のやうな符號を附けることがある。

ˌハ(葉)　ˌハナ(鼻)　ˌサクラ(櫻)　ˌサクランオ(櫻桃)

これは單に假名書きしたものか、またはアクセントにも注意してあるのか、といふ書き方の區別を示すために必要な場合が多い。この稿では、必要に應じて時に用ひたり用ひなかつたりする。大概は略す。

アクセントの第一契機と第二契機　ある一つの單語については、そのアクセント契機は一つで足りるが、連語（又は句）については、主副の二つのアクセント契機が現はれる。それを假に第一契機・第二契機と呼び分ける。例——

ˈジオ(字を)　ˈカイテイˈマス……比較：　サシガイˈマス

かやうに、第一・第二のアクセント契機を大小の二つの「くさび」で書き分ける。

アクセントの型と式　國語のアクセント形式における型(かた)と式(しき)といふことは、佐久間博士の創說として長く記念され

なければならない。佐久間博士は、専ら次に述べる第一分類を主として、第三分類の精神にも觸れてをられる。私は、それをハツキリ式に立てて、更に第三・第四の二種の分類を加へたい。

型の種類を、先づ一音節語と二音節以上の語とに分けてみる。それを更に次のやうに細別する。但、型の呼び名は便宜上の假稱に過ぎない。

一音節語の型
- 1）低　型　〔例〕 ヒ(日)　ハ(葉)　ネ(値・音)　ナ(名)
- 2）高　型　〔例〕 'ヒ(火)　'ハ(齒・刄)　'ネ(根)　'ナ(菜)

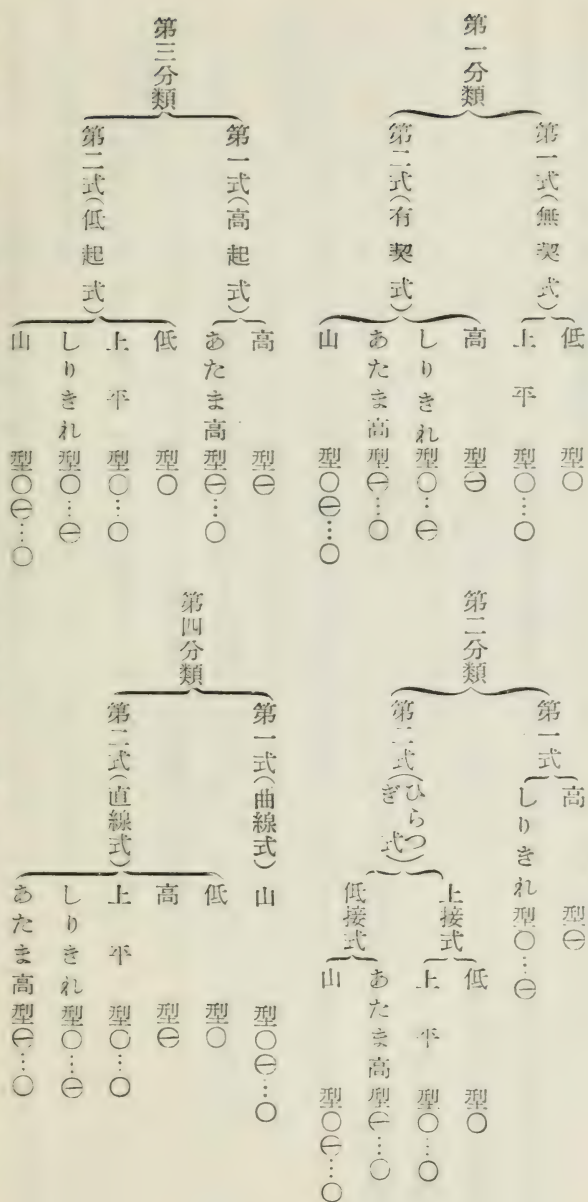
多音節語の型
- 1）上り平ら型(平ら型)　〔例〕 ハナ(鼻)　サクラ　ニワトリ　ニギリメシ
- 2）上り切れ型(しりきれ型)〔例〕 ハ'ナ(花)　ハサ'ミ　モノサ'シ　ココロモ'チ
- 3）あたま高型　〔例〕 'ハル(春)　'アサヒ　'ニコニコ　'アカトンボ
- 4）山　型　〔例〕 コ'コロ　ヤ'マドリ　モ'モタロオ　(山型1)
  - ヤマ'ザクラ　(山型2)
  - マツバ'ヅエ　(山型3)

右の型を符號で示す約束を立てておく。一音律節(即ち拗音符のヤ・ユ・ヨを除く外のカナ一字分)を○であらはす。それから⦶はアクセント契楔を含む音節。例――

低　型　○　　高　型　⦶

上平型　○…○　　しりきれ型　○…⦶　　あたまだか型　⦶…○

三　型　○⦶○又は○⦶…○

次に四種の式分類を立てる。式の呼び名も假稱に過ぎない。

ひらつぎ式とは、その最後の音節の高さから、次に來る助詞へ平らに接續するといふ意味で、例へば——

1）　タケ（竹）　タケワ（竹は）　サクラ　サクラワ　ワタクシ　ワタクシワ

2) ハル(春)　ハルワ(春は)　コンニチ　コンニチワ

3) コネコ(小猫)　コネコワ(小猫は)

但、低型の一音節語には助詞が上の高さで連接する。例——

ハ(葉)　ハワ(葉は)　ヒ(日)　ヒワ(日は)

この現象は、低型の一音節語が、もと上平型の長音節語であつたらうといふ推定から見ると首肯される。即ち

ハ＝ハア(葉)　ハアワ(葉は)　ハワ(葉は)　ヒ＝ヒイ(日)　ヒイワ(日は)　ヒワ(日は)

きれつぎ式とは右の反對で、次のやうになる。

ハ(歯)　ハワ(歯は)　ハナ(花)　ハナワ(花は)　ハサミ?(鋏)　ハサミ?ワ(鋏は)

ひらつぎ式を更に上接式と低接式とに分けておくことは、次のやうな二・三音節の助詞の連接法に關する觀察上に便宜がある。その場合に、低接式へは、却つて、きれつぎ式へのと共通の形式を表はす。例——

「マデ」{コレ-「マデ　ワタクシ-「マデ　凡て原型の「上低」を失はない。
　　　　{「アサ-マデ　アケタ-マデ　アタ「マ-マデ　「ハ-マデ(歯まで)　即ち「マデ」が「低低」になる。

東京アクセントの成因　これについてはいろいろな考へが浮んでくる。その二三を書き附けて後微に備へる。

〔一〕發音上の生理的な能因(その一)として、日本語における發聲單位といふやうなものを想定する。それは大體カナ四字分(即ち四音律節)に當るだらうといふことを、音聲の研究第三輯所載の拙稿で述べたら、後に高橋教授の「國語音調論」で激勵して頂いた。この機會に感謝の意を表して置きたい。

東京アクセントといはず、一般に、カナ五字分(五音律節)以上の語には有契式が優勢だけれど、それは恐らく一發聲單位の中で五音律節以上の語を發音してしまはうといふ無意識的な努力の結果ではあるまいか。では、なぜ四音律節以下の語にも有契式があるのか、なぜ五音律節以上の語にも無契式があるのか、といふ不審が起るが、それは次ぎ次ぎに說くやうな他の能因によるのだらう。

(二)發音上の生理的能因(その二)として、東京語に強い母音の無聲化傾向を擧げなければならない。この母音の無聲化から、いろいろなアクセント現象が起つてくる。

(イ)一體に東京アクセントはアタマダカ型の形式を避ける。ところで、その形式が普通に數が少いのはなぜかといふと、一つは、この母音の無聲化によつて制約されるところがあるらしい。例へば、關西地方では母音の無聲化傾向が強くないから、

┐フク(吹く)　┐ツク(附く)　┐シキ(式)　┐キシャ(汽車)　┐キタ(來た)

等とアタマダカ型でいふが、東京では、これらをどうしてもアタマダカ型に發音することができないで、自然に、

フ┐ク(吹く)　ツ┐ク(附く)　シ┐キ(式)　キ┐シャ(汽車)　キ┐タ(來た)

といふ風にアクセントの辷り(次述)を生じる。ここから低起り式の語彙が大分ふえる。その半面にアタマダカ型のアクセントが大いに減るわけ。

(ロ)いはゆるアクセントの辷り及び溯りといふ現象も、この母音の無聲化に基づくものが大部分を占める。あの「心」といふ名詞のアクセントが三音節語には比較的に少い山型になるのも、多分、その語頭の「コ」が半ば(又は時に

全く）無聲化するところから來てゐると私は考へてゐる。

〔附記〕「心」の語頭の「コ」が、半ば無聲化することは、丸山教授の實驗記錄に依つても考へられる。昭和二年刊「音聲の研究」第二輯五四ページ參照。

あの|オツキサマ（お月樣）といふアクセントも、實はオ|ヒメサマ、オ|キミサマ（お君樣）又はオ|フジサン（お富士さん）等の類で、本來はオ|ツキサマであるべきところを、あいにく「ツキ」の二字分の母音が無聲化して、そこにアクセント契機の依り處がないものだから、溯つて上記のやうに語頭の「オ」へ移つたものと考へられる。ところが、この五音節語のアタマダカ型は、言語印象が突ツ掛るやうで甚だ優しみがないところからか、新生層の女子の間にはオツキ|サマといふ型も現はれてゐる。ちやうどアキツ|シマ（秋津島）の型と同じやうに。けれども、東京のやうに母音の無聲化傾向が強くない地方では、もとからオ|ツキサマと發音されてゐる。

ともかく東京語のアクセントを體感するのには、この母音の無聲化現象を深く味はなければならない。

〔注意〕母音が無聲化して、なほアクセント契機に立ち得る例もないではない。が、それが今後、果して長く續くかどうかは豫想を許されない。

ワタク|シータチ　ワタ|シータチ　キ|シコ（女子の名前）　ヤマナ|シーケン（山梨縣）

〔三〕發音上の生理的能因（その三）として、長母音・二重母音・撥母音（アン・オン・エンなど）を含む音節におけるアクセントの溯りが擧げられる。例――

キョオ|トーフ（京都府）　オオサ|カーフ　トオ|キョオーフ

ケエ|キードオ（京畿道）　ホクリ|クードオ　サン|ヨオードオ　トオ|カイードオ　ホウ|カイードオ　トオ|サンードオ

即ち府・道等の直前の音節がアクセント契機を荷ふ際に、長母音節・二重母音節・撥母音節では、その音節の頭にアクセント契機が來る。だからカナの字面では二字目の處にあるが、實際の發音の上では直前の音節に來るといふ法則をはづれてゐない。

なほ撥母音といふのは私の假稱で、鼻母音とは違ふこと特に改めて言ふまでもない。それから、長母音節・二重母音節・撥母音節の三つを總稱して、暫く複音節といつておく。

〔四〕發音上の生理的能因（その四）として、東京語における撥音にはアクセント契機を荷ふ力がないことを擧げられる。即ち〇|ン乃至〇〕|ン〇〇といふやうな形式は一つもない。女名前の「ウメ」に「オ」がついて「オウメ〉オンメ」になると、そのアクセントも變つてオ|ウメ〉|オンメとなる。但、もちろんオ|ウメチヤン ともいふ。

唯一の例外としては、コドモコトバで|ンヤンヤといふ風に發音するが、そのンは純粹のmではなくて、その調音の重點はやはり喉にある。それを音字では〔ɯ〕であらはす。

なほ、促音にもアクセント契機を荷ふ力がない。

〔五〕發音上の生理的能因（その五）として、ある特質を持つ音聲が語の始め又は最終の音節に立つと、その語の全體のアクセントを平ら化する力があるらしい。例へば草の名で某草（なになにきう）といふと、それは必ず上平型になる。また、カナ二字以上の村名を某村（なにむら）といふときにもさうだ。

ツキミーソオ（月見はツキ|ミ）　アツモリーソオ（敦盛はア|ツモリ）　ツリガネーソオ（釣鐘は上平型）

ムサシノムラ　ミタカムラ(三鷹)　ミブムラ(壬生)

かういふ例が他にも多くあるだらう。それを發見するのがアクセント法の一つの仕事だ。

〔六〕言語心理的能因の一として、同音語の區別を望むところから、ハシ(箸)とハシ(橋)や、ハナ(花)とハナ(鼻)のアクセントを異にするといふやうなこともあるらしい。同じ「青山」を、地名(アオヤマ)と苗字(アオヤマ)とで、東京では言ひ分けてゐる。後に述べる同音語の寺號と地名と苗字とを言ひ分けることなどは、その最も著しい例だらう。

〔七〕言語心理的能因の二として、特に聽者の注意を引くために、固有名詞(特に普通名詞と同語の女名前)と新語とをアタマダカ型に發音することが注意されてゐる。これは、ローマ字で固有名詞を大文字で書き始めることと大體同様な心理的關係にある。

〔八〕言語心理的能因の三として、東京語におけるアクセント感覺(言語感覺の一分野)の特質について考へなければならない。

(イ)第一音節から第二音節へ昇る開きが比較的に廣いこと。從來の三段觀では、その上昇を、下の高さから中の高さへと上の高さへとの二つにしてあつて、その中の高さは、簡略表記法では下の高さに攝しられてゐる。ところが私達の觀察では、その下中の開きが相當に廣いと感じる。ハナワ(花輪)のハナの開きと、ハナシ(話)のハナの開きとを大體同様に見るのです。卽ち共に「低・上」と見て、なほそのうへに「花」のハナは「低・高」と見る。

東京アクセントには、よく地方にある下中上……又は下下上……のやうな型がなくて、第一音節が低なら第二音節は直ぐ「高」又は「上」の高さへ大きく開いて昇るといふ、一つの特質がある。この第一音節から第二音節への開きを相

當に廣いと考へるところに、私は、東京語における言語感覺の廣濶性といふやうなものを認めたい。

〔附記〕 山田美妙齋は、山櫻(やまざくら)のアクセントを「第三上」と注した。その簡略二段（彼も精密には三段觀だつた）の表記法によると、これは「平平上平平」を意味する。それを是正して佐久間博士は「下上上中中」とされた。私の「低上上低低」に當る。ところが、その二つの「上」のうちでも、第二の上は第一の上よりも低い、半音も低い。だから、假に「下上中下下」と發音して見ても「下中上下下」の發音よりはおかしくない。それほど第一音節から第二音節への開きが大きい。このことは、いはゆる平ら型の「サクラ」の「サ」と「ク」との間の關係でも同樣です。山櫻の「ヤマザ」を「下上上」として、櫻の「サクラ」を「下中中」とすることは、單に高低關係だけで國語のアクセント現象を說明しようとするところから來る一種の「ムリ」だと考へる。そこに私のコヱゼキ(glottal stop)觀を導き入れたい。

(ロ)前述(四二ページ)のアクセントの式の第四分類で、直線式と曲線式とを分けた。その曲線式の山型一を、東京語(特に三音節語の固有名詞)では強く避ける傾向がある。例へばカナ三字分の名前では、|アキラ, |フミオ, |ハルヨ, |ハルエ, |ハルミなど凡て直線式のアタマダカ型か上平型かで、曲線式の山型一は、僅に例外的なアクセントの辷りによる十數例(ヒ|サコ, フ|サコなど)しかない。

次に苗字でもさうで、|ナガノ, |サワダ, |サクマ, |ウエダ, |ヤマダ, |カメイなどの外は、ツ|シマ(津島)のやうなアクセントの辷りによる山型のものしかない。

地名はアタマダカ型(|アソウ, |イヅミ, |イヅモなど)とシリキレ型(エチ|ゴ, オワ|リ, サツ|マなど)とになつて、山型一はツ|シマ(對馬)のやうな類に過ぎない。

漢語でもジカン(時間・次官)かジカン(時間)かで、ジカンとはいはない。シカン(士官)、キカン(機關、器官、汽罐)、フキン(布巾、附近)などはアクセントの辷りによる。

といつてカナ三字語に曲線式の型がないわけではない。ただ少いといふだけだ。その少いうちからでも新しく、直線化して行くのがある。例へば「朝日」や「若菜」などがそれ。

「朝日」や「若菜」は、その後部語の「日」「葉」が低型で、前部語の「朝」「若」が有契式だから、その複合アクセントは山型一になるのが法則だ。だから山田美妙齋の日本大辭書(明治二十五・六年刊)にも、神保・常深(つねみ)兩氏のアクセント辭典(昭和七年刊)にも、佐久間博士の諸著書(特にアサヒ)にも、みなさうしてあるが、今の若い人達は悉くアタマダカ型に發音する。一口(くち)に時代の移りだといつて了へばそれまでだけれど、そのそこには、東京語のアクセント感覺が一般に山型一のカタを嫌ふといふことがあると考へられる。これは畢竟、東京語における言語感覺の直線性ともいふべきものの働きによるので、おそらく江戸以來の傳統を引く東京の「生活」に根ざしてゐる一種の言語現象だと思ふ。氣早で、一本調子で、曲がない。非音樂的だ、が、同時に「言語的」なのだ。そこを見なくてはならない。長所としても短所としても。

(ハ)おなじ直線的形式のうちでも、アタマダカ型と上平型とでは、上平型が優勢だ。これは、東京語の言語感覺における平板性ともいふべきものの一つの現はれであらう。

一般に、三音節の名詞でアクセントの不明な語があつたら、先づ第一に上平型、次にアタマダカ型に發音して、その適否をアクセント感覺に訴へて見ることだ。さうして、もし、アタマダカ型と上平型との二つの間に迷ふことがあ

つたら、假に上平型に從つて置いて、それからおもむろに正しいアクセント如何と調べて差支ない。當らずといへども遠からずだから。

〔九〕言語心理的能因の四として、複合語における前・後-部語の分界をハツキリさせようとする心持が働いてゐるらしい。例へば——

トリ(鳥)　|チ-ドリ　ヤ|マ-ドリ　コ|マ-ドリ　ヒ|クイ-ドリ(クイは一複音節)

ムシ(虫)　アブ|ラ-ムシ　ヒト|リ-ムシ

サクラ(櫻)　ハ-|ザクラ　ヤマ-|ザクラ　ヨシノ-|ザクラ　|**カサ**(傘)　ヒ-|ガサ　エヒ-|ガサ

アマ-|ガサ　カラ-|カサ

右のやうに、多くは複合語(又は派生語)を形成する前部語の最終音節か又は後部語の第一音節にアクセント契機が現はれる。|ミワドリなどの上平型は、これとは別な他の能因によつて無契化したのだらう。おそらく次項の心持によつてか。

〔一〇〕言語心理的能因の五として、日常、口と耳とに言ひ慣れ聞き慣れるに從つて、有契式が自然に無契化する傾向のあること。このことについては夙に佐久間博士が説かれてゐる。例——

|デンワ>デンワ　|ホオト>ホオト　|ボク>ボク　|ライオン>ライオン

以上の外にも、まだ、いろいろあるだらう。後に述べる複合動詞・複合形容詞のアクセント法則(私見)などは、實に不思議な現象だと考へてゐるばかりで、どういふわけかまだわからない。

一二音節語の頭高化の傾向について　「花・鼻・發端」や「橋・箸・端」などがアクセントで言ひ別けられてゐるのも、つまりは、これらのコトバが日常の生活語彙として活動してゐるからで、もし一たび日常の生活語彙の圏内から離れると、いつまでそれぞれの原型を保つて行くか疑はしい。今の中年階級の「ボク(僕)が新生層で上平化したのと反對に、これらは或は頭高化しはしないかと思はれる。ここでは簡單に一二例を擧げて、その大體の傾向だけを述べておく。

「香」でも「世」でも、山田美妙齋は「平」としてゐるが、今では、どちらも「カ」「ヨ」と高型に發音する。共に文語的なコトバ。日時の「日」なども低型だけれど、ソノヒソノツキなど高型にいふ。

「鷺」は上平型で「詐欺」はアタマダカ型だ。それを少年は平氣で鷺をも「サギ」と呼ぶ。「サギ」は悪いことだと教へられて、はじめてサギと呼ぶやうになる。

「梅雨」も上平型でツユだけれど、少年は自然に「ツユ」といふ。それでは草の葉の「露」になると父は教へる。それでは「お汁」の「汁」になると母は教へる。教へられた子供はそれから直すとして、教へられない子供は大人になつてもそれで通す。さうして、教へられる子供は比較的に少數で、教へられない子供が大多數だつた。少くともこれまでは。そこで次の時代には「サギ」(鷺)や「ツユ」(梅雨)などが數の上で優勢になつたと假定すると、前代の正統を傳へたサギ「平型」やツユ(平型)の子供は笑はれて隅ツこの方へおしやられてしまふ。そのとき僕は、私は、お父様が、お母様が、と主張したつて仕方がない。仲裁ならぬ「多數は時の氏神」といふことが、コトバの世界の鐵則なんだから。

ここで思ひ合はすのは「雲」と「蜘蛛」とのアクセントのことだ。それを東京では同じに「クモ」といふ。それを言ひ別ける地方が絶對的に廣いのに。私は思ふ、東京でも昔はクモと「クモ」(又はクモ)と言ひ別けてゐた。それが、いま言

つたやうな調子で クˈモ(又はクモ)の方がˈクモに變つたのだらう、と。だから、新しく全國的に協定して、雲と蜘蛛とをアクセントで言ひ別けるやうにすることも決して無理なことではないと考へる、東京語の發音では「シ・ヒ」の混同が常なのを、國語の標準的發音としては矯正してゐるやうに。それはともかく、この一二音節語の頭高化の傾向があるといふことを正當に認めておくことは、單にアクセントだけの問題でなく、廣く國語の推移に關する或る一つの暗示を體感することになるわけがある。

「お」のアクセント 接頭語の「お」には不思議な力がある。大體、次のやうな法則が認められる。

(一)カナ三・四字分の名詞で、上平型は「お◐○○(○)」に、有契式は「お○○○(○)」となる。即ち有契・無契が轉換する。

1) **有契式が上平化する例：** ザシˈキ—オ-ザシキ　ワカˈレ—オ-ワカレ　タノシˈミ—オ-タノシミ

ソナシˈキ—オ-ソオシキ　チカˈラ—オ-チカラ　ハナˈシ—オ-ハナシ　テˈホン—オ-テホン　トショˈリ—オ-トショリ

例外：ˈテンキ—オˈ-テンキ

2) **上平型が有契化する例：** クルマ—オ-ˈクルマ　テガミ—オ-ˈテガミ　ハガキ—オ-ˈハガキ　ボオシ—オ-ˈボオシ

ハオリ—オ-ˈハオリ　センタク—オ-ˈセンタク　クスリ—オ-クˈスリ(アクセントのどりによる)

例外：ダンゴ—オ-ダンゴ　トナリ—オ-トナリ　シタク—オ-シタク　カラダ—オ-カラダ(オ-ˈカラダとも)

ナマエ—オ-ナマエ

(二)カナ一・二字分の名詞で、「◐」「○◐」は「○」「○○」となる。例——

1)　⦶>○　　ˡヒーオーヒ(火)　ˡメーオーメ(目)　ˡテーオーテ(手)　ˡスーオース(酢)

2)　○⦶>○○　コˡメーオーコメ　ミミーオーミミ　トˡシーオートシ　イˡモーオーイモ　テˡラーオーテラ　コˡナーオーコナ

例外：　セˡワーオーˡセワ

(三)「⦶○」「⦶○のアクセントの辷りによる○⦶」及び「○」「○○」「○○○○」は原型を保存する。例――

甲
1)　⦶○　　オーˡカサ　オーˡツエ　オーˡトモ　オーˡミソ　オーˡネぎ　オーˡムコ　オーˡコエ((オーコエとも))
　　　　　オーˡヤド((オーヤドとも))
2)　○⦶　　オークˡツ　オーチˡチ　オースˡシ

乙
1)　○　　オーハ(葉)　オーナ(名)　オーチャ(茶)　オーコ(子)
2)　○○　　オーカマ　オークチ　オーカオ　オーヨメ
3)　○○○○　オートモダチ　オーハキモノ　オールスバン　オーソオシキ

以上の三則は、佐久間博士の「日本音聲學」五二三―五ページに載せられてゐる原型の保存と化成との諸種の語例から歸納して纏めたもの。なほ次の二則は全く佐久間博士の發見に係る。

(四)有契式の形容詞は上平化する。例――

アˡツイーオアツイ　サˡムイーオサムイ　ツˡヨイーオツヨイ　タˡカイーオタカイ　ハˡヤイーオハヤイ

(五)有契式の動詞から派生した「お……に」の形のアクセントは上平化する。例――

オˡキルーオˡキーオオキ(ニ)　ˡタツータˡチーオタチ(ニ)

カ'エル—カエ'リ—オカエリ(＝)　　ヤ'スム—ヤス'ミ—オヤスミ(＝)

「御」のアクセント　これも佐久間博士の發見です。これを冠しても凡て原型を保つ。例——

'ホン—ゴ-'ホン(本)　　'オン—ゴ-'オン(恩)　　'ヨオ—ゴ-'ヨオ(用)　　キゲン—ゴキゲン

例外：　ホオビ—ゴ-'ホオビ

個詞に附く助詞のアクセント　アクセント法の上では左の三種に分ける。

甲)　'デワ　'デモ　'ニワ　'ニモ　'エワ　'エモ　'トワ　'トモ　'カモ　'デサエ(モ)

'マデ(ワ, モ, が)　'ヨリ(ワ, モ)　'コソ(ワ)　'サエ(モ)　'ナラ(バ)

'ナリ　'ナンカ　'ナがラ　'クライ　'ナド(ワ, モ, デモ, デサエ)

乙)　カラ　カ'ラ(ワ, モ)　ダケ　ダ'ケ(ワ, モ, が)　キリ　キ'リ(デモ)

丙)　ホド　シカ

右の連り方を左に例示する。

甲)　コレ'デワ　コレ'デサエモ　コレ'コソ　コレ'サエ

(花)ハ'ナ-デワ　ハ'ナ-デサエモ　ハ'ナ-コソ　ハ'ナ-サエ

(松)'マツ-デワ　'マツ-デサエモ　'マツ-コソ　'マツ-サエ

即ち無聲式には原型を保つて、有聲式には「低」の高さで幾音節でも續いて進行する。

乙)　コレカラ(行く)(副詞)　コレ-カ'ラが(大變だ)　コレダケ(あればたくさんだ)

コレ-ダ'ケワ　　コレ-キ'リダ

ハ'ナ-カラ(花へ)(副詞)　　ハ'ナ-カラモ(葉からも)　　ハ'ナ-ダケ(頂戴)(副詞)(花だけ)

ハ'ナ-ダケ'デモ(見た'い)

'アサ-カラ(晩まで)(副詞)　　'アサ-カラ'デモ(差支ない)

かやうに、上平型に續く場合に、その下へ更に助詞が附くか附かないかで、自らアクセントを異にする。但、下に「の」が附くと平ら化してもいふ。

丙)　コレホド(言つても)　コレ-ホド-'トワ(思はなかつた)(コレ-ホ'ド-トワ)　ワタク'シ-シカ(ゐませんでした)

〔特別〕　コ'レ-シカ(ない)

個詞述定のアクセント　これも、無契式に附く場合には、上の高さで附くし、有契式に附く場合には、低の高さで附く。但、推量形には副アクセントがある、例——

です	上平型へ附く例：	コレ-'デス	コレ-'デシタ	コレ-デ'ショオ
	有契式へ附く例	ハ'ナ-デス	ハ'ナ-デシタ	ハ'ナ-デ'ショオ
		ア'ナタ-デス	ア'ナタ-デシタ	ア'ナタ-デ'ショオ
だ	上平型へ附く例：	コレ-ダ	コレ-'ダッタ	コレ-ダ'ロオ
	有契式へ附く例	ハ'ナ-ダ	ハ'ナ-ダッタ	ハ'ナ-ダ'ロオ
		コ'コロ-ダ	コ'コロ-ダッタ	コ'コロ-ダ'ロオ

固有名詞のアクセント　簡単に須知の事項を列記する。

〔一〕カナ二字分の女名前はアタマダカ型を原則とする。これに「お-」をつけても「-子」「-さん」等をつけても變らない。これは「佐久間の法則」の一つ。例――

'フミ　オ-'フミ　'フミ-コ　オ-'フミ-サン　'フミ-コ-サン

例外はアクセントの辷りによる「ヒ'サ子，フ'サ子，チ'サ子，チ'セ子，ツ'タ子，フ'キ子」など。

〔二〕カナ三字分の名前は、男子でも女子でも、上平型を原則として、その他にアタマダカ型がある。例――

1)　キミエ，ヨシエ，タマヨ，ハルヨ，ハルミ，シゲミ，コサト，コイト，タケオ，フミオ

2)　カナエ，カナメ，カオル，タマキ，ミサオ，カズエ

4)　'ユリ-カ(百合香)　'キミ-カ(君香)　4)　'ミドリ　'アズマ　'アキラ

〔三〕カナ四字分の名乘(又は名乘風の名前)には次の二類四種がある。

1)　マサシゲ　ヨリトモ　ヒデヨシ

2の1)　ヨ'シイエ　タ'カノリ　ノ'リナガ　2の2)　ヨシ'サダ　アツ'タネ　(アクセントの辷りによる)

2の3)　'キンモチ(公望)　'キントキ(金時)　(アクセントの溯りによる)

〔四〕接尾語で彙類したものを例示する。

太郎・四郎・五郎・九郎　1)　'タロオ　'シロオ　'ゴロオ　'クロオ　2)　コタロオ　コシロオ　コゴロオ　サンタロオ　ケエシロオ　ジュウゴロオ　3)　ト'モタロオ　ト'モシロオ　*キ'クゴロオ

4) カツ'タロオ　ヤス'シロオ　*役者の菊五郎は上平型。

次郎 1) 'ジロオ　2) コジロオ　3) ト'モジロオ　4) 'キンジロオ　'ケエジロオ　'コオジロオ

三郎 1) サブ'ロオ　2) ヨ'サブロオ　3) トモ'サブロオ　4) 'シンザブロオ　5) ジュウザブロオ

十郎 1) ジュウ'ロオ　2) コジュウロオ　シンジュウロオ　トモジュウロオ

一郎・六郎・七郎・八郎・吉郎 1) イチ'ロオ　ロク'ロオ　シチ'ロオ　ハチ'ロウ

2) キイ'チロオ　シンロ'クロオ　トモイ'チロオ　ヘエハ'チロオ(平八郎)　トオキ'チロオ(藤吉郎)

一・吉・三・六・七・八　トモイチ　トモキチ　コオソウ　シンロク　シンシチ　ショオハチ　シンパチ

助　タスケ　トモスケ　マツノスケ　ソオノスケ　ジュンノスケ

平・兵衛 1) 'カヘエ　'ゴヘエ　'マごベエ　'タロベエ　'シンベエ　'ゴンベエ

2) マごヘエ　シンベエ　マンベエ

左衛門　コ'ザエモン　タロ'ザエモン

右衛門 1) ゴエモン　2) カズ'エモン　キチ'エモン(役者の吉右衛門は上平型)

太夫　ツ-ダユウ(津-)　コ-'ダユウ(小-)　モン-'ダユウ(紋-)　ツバメ-'ダユウ(燕-)　トサ-'ダユウ(土佐-)

セつツ'ダユウ(攝津-)

〔九〕カナ二・三字の語字は上平型とアタマダカ型。例外はアクセントの上りによる。

カナ二字分のもの：　1) ホリ　モリ　ハが　ドイ　イグ　シグ　(凡て「田」の附くもの)

2) 'ミブ　'ニレ　'エギ　'ユイ　'ホシ

カナ三字分のもの、　1) フクイ　ウエダ　ミワタ　2) 'ナガノ　'ミヤタ　'ヨシノ

例外的形式　ツ'シマ　(「平田」はヒラタとも'ヒラタともいふ。)

〔六〕カナ四字分の苗字は上平型と山型一とを原則として、少数のアタマダカ型と山型二とがある。例——

1) マツモト　マツザワ　ミナモト　フジワラ　2) マ'ツザキ　タ'チバナ　ト'クガワ　フ'ジカワ

例外的形式　マツ'シマ　イチ'カワ　ヨシ'カワ　タチ'カワ

3) 'サクライ(櫻井)　4) サク'ラ-ネ(櫻根)　ミズ'ノ-エ(水之江)

〔七〕カナ五字分の苗字(藝名も之に準じる)は次の通りに二種ある。例——

1) キン'ダイチ　アクタ'ガワ　ヤマ'ノウチ　ウチ'ガサキ　2) サイオンジ　トクダイジ

藝名) ヒタ'チ-ヤマ　ウメ'ガ-タニ　デワ'ノ-ウミ

〔八〕苗字と名前とを一續きに呼ぶとき、それだけで一語のアクセントをかたちづくることがある。例——

'セキヤ(關屋)　'トシコ(敏子)　セキヤ'トシコ(關屋敏子)　'ヤナギ(柳)　'カネコ(兼子)　ヤナギ'カネコ(柳兼子)

〔九〕上平型の人名へ「君」又は「氏」、「氏」を附けて呼ぶ場合には、人名の最終音節にアクセント契機をおく。例——

ヤマ'ダ-クン　ウエ'ダ-シ　マツ'イ-ウジ　ゴ'トオ-クン(トオで一複音節)　フミ'オ-クン　マサ'オ-シ

〔十〕カナ二字分以上の名前を下略して、上のカナ二字分で呼ぶときには、凡てアタマダカ型にする。例——

'ハチ　'クマ　'マサ　'ゲン　'トラ　'カメ

〔十一〕「公」「坊」を附けて呼ぶときには次のやうになる。

ハチー'コオ　　クマー'コオ　　トラー'コオ　　ハチー'ボオ　　クマー'ボオ

〔十二〕寺號から出た苗字や地名がある。それが次のやうに言ひ分けられてゐる。但、表中＊印のものは實際に筆者は經驗してゐないが、假に有るとして發音すればかうなるといふことを示す。特例は「吉祥寺」の地名ぐらゐ。

寺　號	苗　字		地　名
＊'サイオンジ（へお參りに行く）	サイオンジ（さん）	サイオン'ジ（君）	＊サイオン'ジ（へ行つて來る）
＊'トクダイジ（　同　）	トクダイジ（さん）	トクダイ'ジ（君）	＊トクダイ'ジ（　同　）
'ゴオトクジ（　同　）	＊ゴオトクジ（さん）	ゴオトク'ジ（君）	ゴオトク'ジ（　同　）
＊'リュウゾオジ（　同　）	リュウゾオジ（さん）	リュウゾオ'ジ（君）	リュウゾオ'ジ（　同　）
'コオエンジ（　同　）	コオエンジ（さん）	コオエン'ジ（君）	コオエン'ジ（　同　）
＊キチ'ジョオジ（　同　）	キチジョオジ（さん）	キチジョオ'ジ（君）	キチ'ジョオジ（　同　）

〔十三〕カナ二・三字分の國名は、シリキレ型とアタマダカ型とで、苗字の上平型とアタマダカ型なのに比べて、同じ直線中の中で一種の對照を示す。但、國名は餘り口にしないから、アクセントの動くのがある。

1）ト'サ　ミ'ノ（唯一の例外として上平型のイヅがある）　2）'アキ　'アワ　'イキ　'イセ　'イヨ　3）エチ'ご　オワ'リ　カズ'サ　サツ'マ　サヌ'キ　シナ'ノ　スル'が　シモオ'サ　4）'アワジ　'イズミ　'イナバ　'イワキ　'イワミ

〔十四〕縣名は上平型とアタマダカ型になつてゐる。例——

1) ギフ　トチギ　フクイ　2) 'サガ　'チバ　'ナラ　'アキタ　'シマネ　'トヤマ

〔十五〕「道・縣・郡・村」及び「山・海・洋」等の漢語の接尾語が附く場合には、地名の最終音節にアクセント契機を置く。例——

ホつ'カイードオ　トオ'キョオーフ　キョオ'トーフ　サイタ'マーケン　カナが'ワーケン　オオサ'カーシ　ナご'ヤーシ

コオジマ'チーク　ヒガ'シーク　トヨタ'マーグン　ミ'プーソン

【'フジサンだけアタマダカ型】　タカ'オーサン　バン'タイーザン　ニ'ホンーカイ　タイ'ヘエーヨオ

〔十六〕「町」は不定。例——

カスが-チョオ　カスミーチョオ　イナ'リーチョオ　ユ'ミーチョオ

〔十七〕その他の諸接尾語の複合例を一括して次に表示する。

-むら(村)　ミプームラ　ミタカームラ　ムサシノームラ　コクブンジームラ

-やま(山)　ヒラーヤマ　ツクバーヤマ　ニイタカーヤマ

-かは(川)　1) アラーカワ　エドーがワ　2) スミ'ダーがワ　モがミーがワ　-ケ嶽　ヤリ'が-タケ　コマ'が-タケ

普通名詞のアクセント　基本名詞のハナ(花)やハナ(鼻)その他のアクセントは第一原理として暗記しなければならないが、それにしても次の諸法則を知つておけば、多大の利益がある。

〔一〕　第一音節が無聲化すればアタマダカ型にはならない。このことは夙に山田美妙齋が發見して「日本音調論」に書いてゐる。例——

シ|キ（式）　キ|シャ（汽車）　キ|カ（幾何）　キツネ（狐）
キ|ソ（木曾）　キヘエ（騎兵）　フ|チ（淵・緣）　チ|チ（父）

これらを關西ではアタマダカ型に發音する地方が多い。

〔二〕　右の「日本音調論」には、更に「ュ」と「カ行・タ行・ラ行」との結合にアタマダカ型がないとしてある。例へば「ゆかた・ゆき・ゆり」など。

〔三〕　カナ三字（三音律節）語の名詞には山型が少いといふことを上に述べたが、これは東京アクセントの一つの特徴として注意される。

〔四〕　長いコトバ（特に漢語の複合語）をアタマダカ型に發音することが少い。例——

ソオリ|ダイジン　モンブ|ダイジン　モン|ブジョオ

これらを關西ではアタマダカ型に發音する地方が多い。

複合名詞のアクセント　これにはさすがの山田美妙齋も、その「日本音調論」に「實に難中の難局」と嘆じて、その研究の成果を後世に遺して逝つた。私達は、その志を繼いで完成を後日に期したい。左の十二ケ條の法則は私見。

〔一〕　五音節以上は山型を普通とする。これは上記の發音の生理的能因（一）とアクセントの心理的能因（四）とから起ると考へられる。その後者の結果は次の數項に現はれてゐる。

〔二〕　前部語が三音節（又は三音節以上）で、後部語の原アクセントが○○又は○㊀（即ち低起り式）の場合には、その複合語の新アクセントは原則として○()㊀・○○となる。例——

ムシ（蟲）　アブ'ラームシ　　ヒト'リームシ　　デン'デンームシ　　**イヌ**（犬）　キチ'ガイーイヌ　　ドロ'ボオーイヌ

〔三〕　同じく後部語が①○ならば原則として○○○-①○となる。この傾向は四音節語にもある。

'アメ（雨）　ニワカー'アメ　　ヌカー'アメ　　**'カサ**（傘）　モヤイー'がサ　　アイアイー'がサ　　アマー'がサ

'フネ（船）　タカラー'ブネ　　ツカイー'ブネ　　オヤー'ブネ

'コエ（聲）　カナキリー'ごエ　　ダミ'ーごエ　　**'ボチ**（墓地）　アオヤマー'ボチ　　タマー'ボチ

〔四〕　前部語が二音節（又は三音節以上）で、後部語が直線式（即ち○○○又は○○①又は①○○）の場合には、その複合語は原則として(')○-①○○となる。例——

サクラ（櫻）　ヤマー'ザクラ　ヤエー'ザクラ　ヨシノー'ザクラ　　**マツリ**（祭）　ハルー'マツリ　アキー'マツリ　カンダー'マツリ

ジンシュ（人種）　アジヤー'ジンシュ　　モオコー'ジンシュ　　ヨオロツパー'ジンシュ

'タイシ（大使）　ゼンケンー'タイシ　　チュウベエー'タイシ（駐米）

ガツコオ（學校）　シハンー'ガツコオ　　オンがクーガツコオ　　**'ダイジン**（大臣）　ナイムー'ダイジン　　リクぐンー'ダイジン

この形式が現代の普通語に最も多い。

〔五〕　同じく後部語が○①○の場合には、原則として○○-○①○となる。但、例外は○○-①○○となる。

ツ'ツジ（躑躅）　ベニーツ'ツジ　　ヤマーツ'ツジ　　**タ'マゴ**（卵）　ナマータ'マご　　シャンハイータ'マご

チャ'がマ（茶釜）　'ブンブクーチャ'がマ　（'ブンブクーチャ'マがと訛つていふ）

シ'カン（士官）　リクぐンーシ'カン　カイぐンーシ'カン　セエネンーシ'カン　**キ'カン**（機關）　トクムーキ'カン　センデンーキ'カン

例外：　コ!コロ(心)　ヤマトー!ごコロ　コドモー!ごコロ　コイー!ごコロ

〔六〕 同じく後部語が○㊤○○の場合には、原則として○○-○㊤○○となる。例――

タ!チバナ(橘)　ハナータ!チバナ　ム!ラサキ(紫)　エドーム!ラサキ

キ!チガイ(狂)　ヤキュウーキ!チガイ　イローキ!チガイ　シ!ヤクショ(市役所)　トオキョオーシ!ヤクショ　ナごヤーシ!ヤクショ

〔七〕 四音節語のアクセントは多様であるが、やはり上平型が優勢だ。これは發音上の生理的能因その（上述）によるところが多いと考へられるが、なほ後に述べる動詞・形容詞の複合アクセントの上平型が大いに加擔してゐることを見逃してはならない。

〔八〕 四音節語の後部語の原アクセントが㊤○の場合には、複合語の新アクセントは原則として○○㊤○となる。第二には上平型となる。例――

アマー!がサ　スげー!がサ　ミヅー!がシ　ハナー!ムコ　イシー!ウス　スカー!アメ　オヤー!ブネ　アマー!ぐモ　ムぎー!カス　ハトー!ヅエ

上平型ノ例：　キヌイト　キリアメ

例外：　ス!ミーマツ　!オイーマツ　ヒト!ツーマツ　など「松」は特別の現象を示す。

〔九〕 後部語が○○で、前部語が㊤○又は○㊤(節ち有裝式)の場合には、複合語は原則として○㊤○○となる。

ア!サーがオ　ア!サーカゼ　ア!サーザケ　ア!サーぎリ　ハ!ルーカゼ　ハ!ナーヨメ　ヤ!マードリ

アキー!カゼ(アクセントの訛りによる)

〔十〕 右の二則の外は、一般に上平型が多い。

〔十一〕　以上を大體の原則として、第二形式としては上平型、第三・第四形式としては他の型も見えるが、なにぶん二音節語のアクセント形式が時代によつて變つてゐる（殊に上平型をアタマダカ型に變へたのが多いやうに思はれる）から、單一語と複合語との間のアクセント法則をハツキリと尋ねることがむづかしい。

〔十二〕　複合意識を失つて古語の域に入ると、本來○○○○だつたものも○⊖○○となる傾向がある。けだし○⊖○○は四音節の一語として最も安定性の高いものなのだらう。五音節の○○⊖○○（ヤマザクラ・アイウエオの型）と對照して面白い現象だと考へる。

〔附記〕私は昭和四年四月の音聲學協會の研究會で、東京方言における複合語のアクセント法則について、名詞では後部語の原アクセント、動詞では前部語の原アクセントが、その複合語の新アクセントを支配するといふことを述べたが、それは誤つてゐなかつた。就中、動詞の方は後述の通りです。名詞の方にも、もつともつと簡單な法則があるだらうと信じる。さうでなければ、大衆が無意識裡に自然に正しくアクセントを操作することができないはずです。

動詞のアクセント　その型は次の通り。

上平型		〔例〕	サク（咲く）	ワラウ（笑ふ）	アラウ（洗ふ）	ハジメル（始める）	アコガレル（憧れる）
有契式	甲類	〔例〕	!カク（書く）	ハ!ナス（話す）	ヒ!ラク（開く）	カク!レル（隠れる）	オトロ!エル（衰へる）
	乙類	〔例〕	ツ△!ク（附く）	フ△!ク（吹く）	ス△!ク（好く）		
	丙類	〔例〕	!ハイル（入る）	!カエル（歸る）	!カエス（歸す・返す）	トオル（通る・透る）	

右の有契式乙類は、甲類のアクセントの通りによる。同じく丙類は、甲類のアクセントの溯りによる。

左に、上平型と有契式乙類との同音語の例をあげておく。

上平型	フク(拭く)	ツク(突く・撞く)	スク(梳く・透く)	フイテ(拭いて)等となる
有契式乙類	フ'ク(吹く)	ツ'ク(附く・着く・吐く)	ス'ク(好く)	'フイテ(吹いて)等となる

派生動詞のアクセント　その一族のアクセントは、すべて親動詞と同じ式を保つ。例——

上平型	飛ぶ	トブ	トバス	トバセル	トバレル	トベル
有契式	読む	'ヨム	ヨ'マス	ヨマ'セル	ヨマ'レル	ヨ'メル
	話す	ハ'ナス	ハナ'サス	ハナサ'セル	ハナサ'レル	ハナ'セル
	吹く	フ'ク	フ'カス	フカ'セル	フカ'レル	フ'ケル
	入る	'ハイル	ハイ'ラス	ハイラ'セル	ハイラ'レル	ハイ'レル

動詞から派生した名詞のアクセント　この法則は山田美妙齋の發見です。その法則を私の言葉で述べると次の通り。

（一）　動詞の基本形のアクセントが上平型ならば、その名詞化したアクセントも上平型になる。例——

ワラウ—ワライ(笑ひ)　タタム—タタミ(疊)　マケル—マケ(負け)　ソエル—ソエ(添へ)　ハジメル—ハジメ(始め)

（二）　動詞の基本形のアクセントが有契式ならば、その名詞化したものはシリキレ型となる。但、一音節語は第三則による。例——

'ヨム—ヨ'ミ(讀み)　'カツ—カ'チ(勝)　ハ'サム—ハサ'ミ(鋏)　ハ'ナス—ハナ'シ(話)　カンガ'エル—カンガ'エ(考へ)

（三）　一音節語は低型となる。例——

!デルーデ(出)　　ネルーネ(寢)

複合動詞のアクセント　これについては實に簡單な法則が働いてゐる。私は、あらゆる複合形式の語例を集めて實際のアクセントに當つて見た結果、最後に次の二則に歸納し得て、そのあまりに簡單なのに驚いた。それよりも、なぜからなるのか不思議で堪らない。

第一則　複合動詞のアクセントは、その前部語の基本形の原アクセントと「式」が反對になる。即ち、前部語が無契式ならば複合語は有契式に、前部語が有契式ならば複合語は無契式になる。但、次に說く第二則の複合形式を除く。

（一）　前部語の基本形の原アクセントが上平型で、複合語の新アクセントが有契式になる例——

○○-○○ トブーノル　トビ!ノル(飛び乘る)　ノルーコス　ノリ!コス(乘り越す)　ヒクーコス　ヒつ!コス(引つ越す)

○○-⦶○ トブー!コム　トビ!コム(飛び込む)　トブー!ダス　トビ!ダス(飛び出す)

ツクーダス　ツキ!ダス(突き出す)　スルー!ダス　シ!ダス(仕出す)

○○-○⦶　トブーツ!ク　トビツ!ク(飛び附く)【備考】トビ!ツクとなるべきところをアクセントのぶりによつて。

○○-○○○　ユクーアタル　ユキア!タル(行き當る)　ツクーアタル　ツキ!アタル(突き當る)

カウーアげル　カイア!げル(買ひ上げる)　スルーアげル　シア!げル(仕上げる)

○○-○⦶○　ウルーハ!ラウ　ウリハ!ラウ(賣り拂ふ)　ユウーツ!ケル　イイツ!ケル(言ひ附ける)

ユクーツ!マル　ユキツ!マル(行き詰まる)　スルータ!テル　シタ!テル(仕立てる)

○○-⦶○○　ワクー!カエル　ワキ!カエル(湧き返る)　ツクー!カエス　ツつ!カエス(突き返す)

ユウー'カエス　イイ'カエス(言ひ返す)　スルーカエス　シ'カエス(仕返す)

○○○-⦶○　タタムー'コム　タタミ'コム(疊み込む)　サぐルー'ダス　サぐリ'ダス(探り出す)

○○○-○⦶　フルウーツ'ク　フルイツ'ク(振ひ附く)【備考】フルイ'ツクとなるべきところなアクセントの辷りによつて。

以下、六音節以上の語は一二例だけ擧げる。

○○○○-⦶○　ウタガウー'ダス　ウタガイ'ダス(怪しいから疑ひ出す)

○○-○○○○　サクーハジメル　サキハジ'メル(咲き始める)〔カキハジメルと比較せよ〕

○○○○-○○○○　ウタガウーハジメル　ウタガイハジ'メル(疑ひ始める)

（二）前部語の基本形の原アクセントが有契式で、複合語の新アクセントが上平型になる例——

⦶○-○○　'トルーツぐ　トリツぐ(取り次ぐ)　'カクーツぐ　カキツぐ(書き續ぐ)

'カツーコス　カチコス(勝ち越す)

⦶○-⦶○　'カクー'コム　カキコム(書き込む)　'ウツーコム　ウチコム(打ち込む)

'キルー'トル　キリトル(切り取る)　'トルー'ダス　トリダス(取り出す)

⦶○-○⦶　'トルーツ'ク　トリツク(取り附く)

○⦶-○○　ツ'クーソウ　ツキソウ(附き添ふ)(第二アクセントでツキ'ソウとも)

○⦶-⊖○　フ'クー'ダス　フキダス(吹き出す)　フ'クー'コム　フキコム(吹き込む)

⦶○-○○○　'カクーアげル　カキアげル(書き上げる)　'トルーヤメル　トリヤメル(取り止める)

'ミルーマワル　ミマワル(見廻る)　'ミルーアげル　ミアげル(見上げる)

⌽○-○⌽○　'トルーノ'コス　トリノコス(取り殘す)　'カクーツ'ケル　カキツケル(書き附ける)

　　　　　　'ホルーサ'げル　ホリサゲル(堀り下げる)　'ミルーノ'コス　ミノコス(見殘す)

⌽○-⌽○○　'トルー'カエス　トリカエス(取り返す)　'タツー'カエル　タチカエル(立歸る)

○⌽-○○○　フ'クーアがル　フキアがル(御飯が吹き上がる)　フ'クートバス　フキトバス(吹き飛ばす)(フキト'バスとも)

○⌽-○⌽○　ツ'クーマ'トウ　ツキマトウ(附き纏ふ)　フ'クーオ'ロス　フキオロス(吹き下ろす)

○⌽-⌽○○　フ'クー'トオス　フキトオス(吹き通す)　フ'クー'カエス　フキカエス(吹き返す)

○⌽○-⌽○　ナ'ぐルー'アウ　ナぐリアウ(擲り合ふ)　ハ'ラウー'コム　ハライコム(拂ひ込む)

　　　　　　ハ'ナスー'コム　ハナシコム(話し込む)

但、この複合形式には、前部語の基本形の原アクセントに引かれて○⌽○○○となるのが少なくない。第二則の例(ハ)參照。

⌽○○-○○　'トオルーコス　トオリコス(通り越す)

⌽○○-⌽○　'ハイルー'コム　ハイリコム(入り込む)　'モオスー'コム　モオシコム(申し込む)

　　　　　　'モオスー'デル　モオシデル(申し出る)

⌽○○-○⌽　'カエルーツ'ク　カエリツク(歸り着く)　カエリツイタ(歸り着いた)

以下、六音律節以上の語例二三。

⌽○○-○○○　'モオスーソエル　モオシソエル(申し添へる)　'モオスーアげル　モオシアげル(申し上げる)

⦶○-○○○○　'カケーハジメル　カキハジメル(書き始める)　'デルーハジメル　デハジメル(人がポツポツ出始める)

○⦶-○○○○　フクーハジメル　フキハジメル(吹き始める)

○⦶○-○○○○　ハ'ナスーハジメル　ハナシハジメル(話し始める)

⦶○○-○○○○　'カエルーハジメル　カエリハジメル(帰り始める)　'トオルーハジメル　トオリハジメル(通り始める)

第二則　前部語の基本形の原アクセントが○⦶○の場合には、複合語の新アクセントも○⦶○○○となる。例——

○⦶○-○○　ニ'ジルーヨル　ニ'ジリヨル(膝行り寄る)　オ'ソレイル(恐れ入る)も之に準ず。

○⦶○-⦶○　ナ'ぐルー'コム　ナ'ぐリコム(擲り込む)　ド'ナルード'ナリコム(怒鳴り込む)

○⦶○-○⦶　カ'ジルーツ'ク　カ'ジリツク(噛り附く)　カ'ブルーカ'ブリツク(噛り附く)

○⦶○-○○○　ナ'ぐルートバス　ナ'ぐリートバス(擲り飛ばす)　ナ'ぐルーツ'ケル　ナ'ぐリツケル(擲り附ける)

○⦶○-○⦶○　タ'タクーコ'ワス　タ'タキコワス(叩き壊す)　タ'タクーオ'コス　タ'タキオコス(叩き起す)

○⦶○-⦶○○　ナぐルー'カエス　ナ'ぐリカエス(擲り返す)

複合動詞から派生した名詞のアクセント　これも私案ですが、多分、一言で盡きると思ひます。即ち凡て上平型。

トビノリ(飛乗)　ノリコシ(乗越)　ヒつコシ(引越)

トビコミ(飛込)　シダシ(仕出し)　シアげ(仕上げ)

トリツぎ(取次)　フキコミ(吹込)　ツキソヒ(附添)

トリカエシ(取返)　ハライコミ(排込)　モオシデ(申出)

なほ前項に擧げた各種の複合形式の例を參照。

以上の二項については、山田美妙齋も夙に研究に手を着けて殆ど成功に近づいてゐる（その著「日本音調論」參照）のですが、どういふものかアクセントの觀察に誤り（或は時代の變遷によるものか）があつて、その上に複合形式の十ケ條を逸してゐたので、歸納的な結果が得られず、私に仕事を殘してくれたやうなものでした。

動詞から派生した對照の重ね言葉のアクセント　前項と似て非な次の類のコトバにも、チャンとした法則がある。

（一）　前部語が上半型のもの。前部語の終りから一音節目にアクセント契機がくる。例——

ア!ゲーサゲ　ノ!リーオリ　ア!ケータテ　ヤ!リートリ　ア!ライーハリ　!ネーオキ（する—住むこと）

（二）　前部語が有契式のもの。前部語の終りから二音節目にアクセント契機がくる。例——

!ヨミーカキ　!ダシーイレ　!イキーシニ　!カチーマケ　!ハキークダシ（する—吐きくだすのハキクダシとはちがふ）

タ!チイーフルマイ（タチイを一つの前部語とアクセント感覺が感じるのだらう）

（三）　第二項の類でアクセントの辷りによる特別な型がある。往來のイキ!キがそれで、この語頭のイはヤ行のイで、それがキに連つてアクセント契機を與へることがむづかしい（不可能ではないが）のだらう。そこで次のキも無聲化するゆゑ最後のキに辷つて行つたものと考へられる。さういへば、上述の「ユ」と「カ・タ・ラ」三行の結合を「發音不十分」といつた山田美妙齋の卓見が思ひ出される。

形容詞のアクセント　その基本形式は次の通り。

上平型
- 1
  - イ　アカイ　マルイ　ウスイ　オモタイ　ネムタイ　ツメタイ
  - ロ　'トオイイ【特別な形】
- 2　カナシイ　ヨロシイ　((ヨロ'シイといふ形が新生層に起つて來てゐる))

有契式
- 1
  - イ　シ'ロイ　ア'オイ　ク'ロイ　ナ'ガイ　オ'オイ(多い)('オオイにあらず)　ハ'ヤイ　アリガ'タイ
  - ロ　フ'カイ　チ'カイ　ヒ'クイ　ク'サイ　スツ'パイ
  - ハ　'ナイ　'イイ('ヨイ)　'コイ(濃い)
- 2　ウレ'シイ　ナツカ'シイ　オトナ'シイ　マチドオ'シイ

形容詞から派生した名詞のアクセント　次のやうな各種の樣式と型とがある。

1) アカイ—アカサ•アカミ　マルイ—マルサ•マルミ　カナシイ—カ'ナシサ•カナシミ　ヤサシイ—ヤ'サシサ•ヤサシミ

2) シ'ロイ—'シロサ•シロサ•シロ'ミ(但、卵の白味はシ'ロミ)　ナ'ガイ—'ナガサ•ナガサ　ウレ'シイ—ウ'レシサ

3) フ'カイ—フ'カサ•フカ'ミ　ク'サイ—ク'ササ•クサ'ミ

4) オソイ—オソ'ク(もない)　トオイイ—トオ'ク(へ行く)

複合形容詞のアクセント　これにも實に簡單な法則がある。それは、凡て上平型になること。例——

アカイ—ク'ロイ　アカグロイ　アサイ—ク'ロイ　アサグロイ　ウスイ—ク'ロイ　ウスグロイ

アマイ—カ'ライ　アマカライ　アマイ—スツ'パイ　アマズツパイ

ア'オイ—シ'ロイ　アオジロイ　ア'オイ—ク'サイ　アオクサイ

このやうな簡単な法則が、どうしてこれまで氣附かれなかつたのだらうか。それよりも、どうしてかうなるのだらうか。實に不思議で仕方がない。

複合形容詞から派生した名詞のアクセント これも實に簡單な一則。私見。凡て上平型。例――

トオアサ(遠淺)　サスアカ(薄赤)　アマカラ(甘辛)　ウスノロ(薄のろ)

形容語基の名詞アクセント 凡てアタマダカ型。例――

｜アカ　｜シロ　｜アオ　｜クロ

名詞十形容語基の複合アクセント 凡て上平型。私見。例――

ハラアカ　ハラグロ　ホオジロ　メジロ　キナガ　キミジカ　ヒナガ　テナガ　オナガ

ヤマタカ　ハナタカ　セユタカ　ハバビロ

形容語基十名詞の複合アクセント 五音節語と四音節語とに分けて考へる。

〔一〕　五音節語は、後部語の名詞が○○○又は⊖○○の場合には○○-⊖○○、○⊖○の場合には○○-○⊖○又は○○-⊖○○となる。例――

ササギ―シロ¬ウサギ　カスミ―ウス¬ガスミ　ネズミ―シロ¬ネズミ

タスキ―シロ｜ダスキ・アカ｜ダスキ　｜ツバキ―シロ¬ツバキ　｜ハブタイ―シロ¬ハブタイ

ツ｜ツジ―シロ―ツ｜ツジ　ヅ｜キン―アカ―ヅ｜キン・オコソ―ヅ｜キン（(アカ｜ヅキン・オコソ｜ヅキンとも))

右は複合名詞の法則と同じ。

〔二〕 四音節語では、上平型を原則とするが、語義の一轉して原義に遠くなつたものは、第一に○○-○○になる傾向がある。私見。例——

アカアワ(粟)　アカアリ　アカイヌ　アカイモ　アカがシ　アカダマ

アカツチ　アカツラ　アカハジ　アカハラ　アカヒげ　アカヒモ　アカマツ　アカミソ

例外：　ア'カエエ　ア'カがイ(發音上の關係ならむ)

クロイト　クロイス　クロごマ(胡麻)　クロシオ(潮)　クロダイ(鯛)　クロツチ　クロボシ　クロマツ

クロマメ　クロヤマ

タカダイ(高臺)　ヒロブタ(廣蓋)　ヒロハバ　ヒロエン

シロアン　シロイト　シロイヌ　シロウオ　シラウオ　シロぐツ　シロごマ(胡麻)　シラサぎ　シロザケ

シラサヤ　シロタビ　シロヌノ　シロネコ　シロブチ　シロミソ

一轉して有契式になつたもの。

シ'ライト　シ'ラウメ　シ'ラクモ　シ'ラタキ　シ'ラタケ(茸)　シ'ラツユ　シ'ロウリ　シ'ロミズ(水)　シ'ロムク

この他に少數の例外的形式もあるが、大體において右の傾向が强く働いてゐることは明かだ。

形容詞から派生した對照の重ね言葉のアクセント　これは凡てアタマダカ型、例——

'シロクロ　'タカヒク

名詞の對照の重ね言葉のアクセント　これには、アタマダカ型と山型と上平型とがある。例——

1) 'オヤコ　'メハナ　'カげヒナタ　2) ウ'エシタ　ク'サキ(アクセントの辷りによる)　3) ウラオモテ

動詞のアクセント活動　これについて先づ一言すべきは、東京アクセントは、動詞・形容詞とも、そのアクセント活動が複雑だといふことだ。例へば、或る方言のアクセントでは、

ユウ(言ふ)	イワ'ナイ(言はない)	ユウヨ	ユウゾ	イワ'ナイヨ	イワ'ナイゾ
'ヨム(讀む)	ヨマ'ナイ(讀まない)	'ヨムヨ	'ヨムゾ	ヨマ'ナイヨ	ヨマ'ナイゾ

となるが、東京アクセントでは次のやうになる。

ユウ(言ふ)	イワナイ(言はない)	ユウヨ	ユ'ウゾ	イワナイヨ	イワ'ナイゾ
'ヨム(讀む)	ヨ'マナイ(讀まない)	'ヨムヨ	'ヨムゾ	ヨ'マナイヨ	ヨ'マナイゾ

即ち「言ふ」「讀む」の基本形のアクセントに從つて、打消の「言はない」「讀まない」が第一に違ふ、前者では違はない。第二に、その「言はない」が助詞の「よ」と「ぞ」とで違ふ、前者では違はない。かやうに複雑だ。そこで、その「よ」と同類の助詞(甲)と「ぞ」と同類の助詞(乙)とを前以て暗記して置かなければならない。左に右の二類の助詞を列記する。

甲)　ヨ　ネ　ト　つテ　タつテ　マデ　ナンテ　ナンカ　バカリ

乙)　ゾ　ゼ　サ　シ　ワ　ワヨ　ワネ　ノ　ノヨ　ノネ　カ　カイ　カネ　カモ　ナラ　ナリ　ヤラ　ヨリ
　　ノワ　ノモ　ノガ　ノニ　ノオ　ノデ　ニワ　ニモ　デ　が　ケ(レ)ド(モ)

動詞の第二活用形に連る助詞にも、左の二類がある。

甲)　ナがラ

乙)　ツツ　　ワ(しない)　　コソ(しないが)　　サエ(すれば)

右のことは、希望の「言ひたい」といふ形にも、過去の「言つた」といふ形にも、又、形容詞の活動にも適用される。左に、動詞の内から「言ふ」と「讀む」とを代表に取つて、そのアクセント活動の諸相を表示する。甲乙二類の助詞の代表として「よ」「ぞ」(又はサ)などをとる。

言　ふ(上平型)	讀　む(有契式)
ユウ(よ)　イワナイ(よ)　イイタイ(よ)	!ヨム(よ)　ヨ!マナイ(よ)　ヨミ!タイ(よ)
ユ!ウ(ぞ)　イワ!ナイ(ぞ)　イイ!タイ(サ)	!ヨム(ぞ)　ヨ!マナイ(ぞ)　ヨミ!タイ(ぞ)
イイ(ナがラ)	ヨミ(!ナがラ)
イ!イ(ツツ, ワ, コソ, サエ)	!ヨミ(ツツ, ワ, コソ, サエ)
イつ!テ(ワ, モ, コソ, サエ, カラ)	!ヨンデ(ワ, モ, コソ, サエ, カラ)
イつ(!タラ, !タリ, !タつテ)	!ヨン(ダラ, ダリ, ダつテ)
イつタ(よ)	!ヨンダ(よ)
イつ!タ(ぞ)	!ヨンダ(ぞ)
イつチヤつタ(よ)	!ヨンヂヤつタ(よ)
イつチヤつ!タ(ぞ)	!ヨンヂヤつタ(ぞ)

イ!エバ	!ヨメバ
イ!エヨ	!ヨメヨ
イ!オオ	ヨ!モオ

言はない	**言ひたい**	**讀まない**	**讀みたい**
イワナイ(よ)	イイタイ(よ)	ヨ!マナイ(よ)	ヨミ!タイ(よ)
イワ!ナイ(ぞ)	イイ!タイ(サ)	ヨ!マナイ(ぞ)	ヨミ!タイ(サ)
イワ!ナクテワ	イイ!タクテ	ヨ!マナクテワ	ヨミ!タクテ
イワ!ナケレバ	イイ!タケレバ	ヨ!マナケレバ	ヨミ!タケレバ
イワ!ナカつタ	イイ!タカつタ	ヨ!マナカつタ	ヨミ!タカつタ
イワ!ナカつタラ	イイ!タカつタラ	ヨ!マナカつタラ	ヨミ!タカつタラ
イワ!ナカつテ?	イイ!タカつテ?	ヨ!マナカつテ?	ヨミ!タカつテ?

なほ、第二類活用動詞の意志形に連る「ヨオ」は凡て次のやうになる。

スルーシ!ヨオ　　ヤメルーヤメ!ヨオ　　トバセルートバセ!ヨオ

!ミルーミ!ヨオ　　ウ!ケルーウケ!ヨオ　　キラ!セルーキラセ!ヨオ

但、その下を「と」で受けるときには、上平型の動詞に限つて、それを上平型にもいふ。例——

ユウ(言ふ)　イ!オオト(思ふ)　イオオト(思ふ)　**スル**　シ!ヨオト(思ふ)　シヨオト(思ふ)

形容詞のアクセント活動　上平型から「赤い」を、有契式から「白い」「深い」「好い」及び補缺に「濃い」を取つて表示する。

アカイ(よ)　ア'カイ(ぞ)　アカク('ナイ)　ア'カクワ(ナイ)　ア'カクつテ　ア'カケレバ　ア'カカつタ　アカカ'ロオ　ア'カイが(好い)

シ'ロイ(よ)　シ'ロイ(ぞ)　'シロク(ナイ)　'シロクワ(ナイ)　'シロクつテ　'シロケレバ　'シロカつタ　シロカ'ロオ　シ'ロイが(好い)

フ'カイ(よ)　フ'カイ(ぞ)　フ'カク(ナイ)　フ'カクワ(ナイ)　フ'カクつテ　フ'カケレバ　フ'カカつタ　フカカ'ロオ　フ'カイが(好い)

'イイ(よ)　'イイ(ぞ)　'ヨク(ナイ)　'ヨクワ(ナイ)　'ヨクつテ　'ヨケレバ　'ヨカつタ　ヨカ'ロオ　'コイが(好い)

形容詞述定のアクセント　「です」が附くと上平型も有契式に變化する。例――

アカイ　ア'カイデス　カナシイ　カナ'シイデス

【比較】　シ'ロイ　シ'ロイデス　ウレ'シイ　ウレ'シイデス

「ございます」が附くと次のやうになる。

アカイ　アカク　アコオゴザイマス

シ'ロイ　'シロク　'シロオゴザイマス

アリが'タイ　アリ'がタク　ア'リがトオゴザイマス　ア'リがトオ

代名詞のアクセント　次に代表的な語例を掲げる。

自　**稱**：ワタクシ　ワタク'シータチ　ワタクシー'ドモ　ボク(('ボク))　ボクー'タチ(('ボクタチ))

付　**稱**：ア'ナタ　ア'ナタータチ　アナターがタ　キミ　オマエ　'アンタ

人の他稱　アノカ'タ　アノカ'タガタ　アノヒ'ト((ア'ノヒト))　アノヒ'トータチ((ア'ノヒトタチ))

アイツ　アイ'ツーメ　アイ'ツーラ　ソイツ　コイツ

アノモ'ノ　ソノモ'ノ　コノモ'ノ　コノモ'ノータチ　コノモ'ノードモ

事物の他稱　コレ　ソレ　アレ

處の他稱　ココ　ソコ　アスコ(アソコ)　【注意：コ'コ，ソ'コ，ア'コでない】　コ'コイーラ　ココイラヘン

方角の他稱　コチラ　ソチラ　アチラ　コつ'チ　ソつ'チ　アつ'チ

指示冠詞と指示副詞とのアクセント　次に併せ掲げる。

指示冠詞　コノ　ソノ　アノ

指示副詞　コオ　ソオ　アア

數詞のアクセント　第一に國語系統のものを擧げる。〔　〕内は副詞として用ひるときのアクセント。

基數　ヒ'トツ　フタ'ツ〔フタツ〕　ミつ'ツ〔ミつツ〕　ヨつ'ツ〔ヨつツ〕　イ'ツツ　ムつ'ツ〔ムつツ〕　ナ'ナツ

ヤつ'ツ〔ヤつツ〕　コ'コノツ　'トオ〔トオ〕　ハ'タチ　【附記】實際には〔フタァッツ〕といふ風に發音する。

日　ツイタチ　フツカ　ミつカ　ヨつカ　イツ'カ　ムイカ　ナノ'カ　ヨオカ　ココノ'カ　トオカ

ハツカ　ミソカ

人數　ヒ'トリ　フタ'リ〔フタリ〕　ヨつタ'リ〔ヨつタリ〕

次に漢語系統の基數と名數の例とを擧げる。

（一）〔　〕内は副詞として用ひるときのアクセント。

（二）((　))内は第二アクセント。

（三）(—…)は、その上に「十・二十・三十……」等の數が附く場合のアクセント。例へば——

(—イ!チエン)はイチエン(一圓)　ジュウーイ!チエン(十一圓)　!ニジュウーイ!チエン(二十一圓)

!サンジュウーイ!チエン(三十一圓)

等となることを示す。

（四）(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)は、その上に「十」のつく場合に限つて平ら化する。例——

!ゴ(五)　!ジュウゴ(十五)　!ク(九)　ジュウク(十九)

!ゴエン(五圓)　!ジュウゴエン(十五圓)

!ゴセン((ゴ!セン))(五錢)　!ジュウゴセン(十五錢)

【注意】「二十」以上が附く場合には原型を保つ。例——

!ニジュウ!ゴ　!ニジュウ!ク　!ニジュウ!ゴエン　!サンジュウ!ゴセン

（五）(…—)は、その下に數詞が附く場合のアクセント。例へば——

ゴ!ジュウ(ゴジュウ—)は　ゴジュウーイ!チバン　ゴジュウーイ!チエン

等となることを示す。

	番　(年も同じ)	圓	錢	分	秒
イ!チ	イ!チバン	イチエン(—イ!チエン)	イツ!セン(—!イツセン)〔イツセン〕	!イツプン	イ!チビョオ

'ニ	'ニバン	ニエン(—'ニエン)	ニ'セン(—'ニセン)〔ニセン〕	'ニフン	'ニピョオ
サン	サンバン(—'サンバン)	サンエン(—'サンエン)	サン'セン(—'サンセン)〔サンセン〕	'サンプン	'サンピョウ
'シ	ヨバン	'ヨエン	——	——	'ヨピョオ
'ヨン	'ヨンバン	'ヨンエン	'ヨンセン	'ヨンプン	'ヨンピョオ
'ゴ(イ)	ゴバン	'ゴエン(ハ)	'ゴセン(ニ)((ゴ'セン))	'ゴフン(ホ)	'ゴピョオ
ロ'ク	ロ'クバン	ロクエン(—ロ'クエン)	ロク'セン〔ロクセン〕	'ロつプン	ロ'クピョオ
シ'チ	シ'チバン	シチエン(—シ'チエン)	シチ'セン〔シチセン〕	シ'チフン	シ'チピョオ
	ナ'ナバン	ナ'ナエン	ナ'ナセン	ナ'ナフン	ナ'ナピョオ
ハ'チ	ハ'チバン	ハチエン(—ハ'チエン)	ハつ'セン(—'ハつセン)〔ハつセン〕	'ハつプン	ハ'チピョオ
'ク(ロ)	クバン	——	——	——	——
'キユウ	'キュウバン	'キュウエン	'キュウセン	'キュウフン	'キュウピョオ
'ジユウ	'ジュウバン	ジュウエン	ジュつ'セン〔ジュつセン〕	'ジュつプン	'ジュウピョオ

'ニジュウ　フ'タジュウ　'サンジュウ　シ'ジュウ(シジュウー)　'ヨンジュウ　ゴ'ジュウ(ゴジュウー)

ロク'ジュウ(ロクジュウー)　シチ'ジュウ(シチジュウー)　ナ'ナジュウ　ハチ'ジュウ(ハチジュウー)

'キュウジュウ

ヒヤ'ク(ヒヤクー)　イつピャ'ク(イつピャクー)　ニヒャ'ク(ニヒャクー)　フ'タヒャク　'サンビャク

'ヨンヒャク　ゴヒャ'ク(ゴヒャクー)　ロつピャ'ク(ロつピャクー)　シチヒャ'ク(シチヒャクー)　ナ'ナヒャク

ハつピャˈク(ハつピャクー)　ˈキュウヒャク

ˈセン　イつˈセン　ニˈセン　サンˈゼン　ˈヨンセン(ヨンˈセン)　ゴˈセン　ロクˈセン　シチˈセン　ナナˈセン

ハつˈセン　ˈキュウセン(キュウˈセン)

ˈマン　イチˈマン　ニˈマン　サンˈマン　ˈヨンマン(ヨンˈマン)　ゴˈマン　ロクˈマン　シチˈマン　ナナˈマン

ハチˈマン　ˈキュウマン(キュウˈマン)　ジュウˈマン

次に序數のアクセント例。

第ー　ˈダイーイˈチ　ˈダイーイˈチバン　ˈダイーイチバンメ　ˈダイーˈニジュウ　ˈダイーˈニジュウバン

ー目　ヒトツˈメ　フタツˈメ　ミつツˈメ　ヨつツˈメ　イツツˈメ　ナナツˈメ　ヤつツˈメ　ココノツˈメ

次に「ー宛」の例

ー宛　ヒトˈツズツ　フタツズツ　ミつツズツ　ヨつツズツ　イツˈツズツ　ムつツズツ　ナナˈツズツ

ヤつツズツ　ココノˈツズツ　トオズツ

右の「ー宛」の附いたものと附かないものとのアクセントの型を比較して見ると、そこに一貫したアクセント感覺の働いてゐることが認められる。おもへば不思議な言語感覺。それは、次のやうにくづして發音する場合にまで一貫して働いてゐる。

ヒト(つ)ˈツつツ　フタツつツ　ミつツつツ　ヨつツつツ　イツˈツつツ　ムつツつツ　ナナˈツつツ　ヤつツつツ　トオつツ

疑問詞のアクセント　疑問詞のアクセントはアタマダカ型を原則とする。但、少數の平ら型がある。

疑問の個詞：　'ナニ*　ナニモノ　ナニゴト　'ドナタ　'ダレ　'ドレ　'ドコ　'イツ　'イクツ　'イクラ

*「あのナニはどうした」といふやうな場合にはナニ(上平型)となる。

疑問の冠詞：　'ドノ

疑問の副詞：　'イツ　'ドレダケ　ドレダケ　'ドレホド((ドレホド))　ドレクライ　'ドオ(する)

'イクツ　'イクラ　イクラモ　ナンドキ

冠詞のアクセント　冠詞のことは語法の部(三三—四ペ)参照。

(一)「な」のつくものは原型を保存する。例——

1) 'キレエナ　'ミョオナ　'キミョオナ　'ヘンナ　2) タイヘンナ　タイセツナ　ダイジナ

(二)「の」がつくと、擬聲語のアタマダカ型を上平化する。例——

ボロボロノ着物を着た人('ボロボロ)　ダラリノ帶(ダ'ラリ)

(三)「たる」の附く漢語の副詞は次のやうになる。

ダンゼンーダンゼン'タル　'ダンコー'ダンコタル

副詞のアクセント　その種種相を例擧する。括弧内の助詞は、有つても無くても、語幹部の型に變りがない。

1) 'ガラガラ(ト)【注意：ガラガラにあらず】'バラバラ(ト)　'ツルツル(ト)

2) バラバラニ　ツルツルニ　ヘナヘナニ

3) 'テキパキ(ト)　'ジタバタ(ト)　'チラホラ(ト)

4)　ピˈカピカ(ト)　チˈクチク(ト)　スˈパスパ(ト)　子供言葉で裁縫することはˈチクチクするといふ。

5)　パˈラリ(ト)　チˈラリ(ト)　パˈラつト　チˈラつト

6)　シンˈミリ(ト)　サツˈパリ(ト)

7)　ˈチラト(お見受けしました)

8)　ジつト　ソつト　キつト　サつト

9)　-然　ゴーゼン(ト)　ダンゼン(ト)　ダンダンˈゼン(ト)

10)　-乎　ˈダンコ-トシテ　ダンダンˈコ-トシテ

11)　ˈマダマダ(未だ々々)　ˈツネヅネ(常々)

12)　ソˈレゾレ　クˈレぐレ

13)　ツクˈヅク(ト)　シミˈジミ(ト)　ヒロˈビロ(ト)(廣々)　ハレˈバレ(ト)(晴れ々々と)

14)　オリオリ　タビタビ　トキトギ　ナカナカ　ナがナが

15)　ˈカネテ(豫て)　ˈカツテ(曾て)

16)　ˈマサカ　ケつシテ(決して)

17)　ヨˈニン(個詞)　ヨニン(副詞)(ゐる)　ゴˈニン(個詞)　ゴニン(副詞)　クˈニン(個詞)　クニン(副詞)

18)　イˈチバン(個詞)(首席)　イチバン(副詞)(好い)　ˈイつパイ(個詞)　イつパイ(副詞)

イつˈペン(一遍・二遍と數えるとき)　イつペン(副詞)(來たきり)

19) キ'ノオ(個詞)(は天氣だつた)　キノオ(副詞)(來た)

20) ソオシテ　コオシテ　アアシテ

21) ソコデ　ソレデ　ソレカラ

22) スルト　ソオスルト

23) ヨオ'スルニ(要するに)　シタ'がつテ(從つて)

24) シ'カシ　'ケ(レ)ド(モ)　'デスケ(レ)ド(モ)　'デスが　'ダケ(レ)ド　'ダが

25) 'デモ　'ダツテ

26) 'デスカラ　'ダカラ

27) 'サモナケレバ　'トワイエ

28) 'アア(感動の副詞)

【後記】 連語・句法のアクセントについては省略に從ふ。